

出口王仁三郎全集第八卷より『故山の夢』

教鞭 十三歳より十六歳まで

背の高き生徒におぶさりボードに白字じゆうじして教鞭きょうべんをとる
十三の教師のわれは何も知らず女工場にょこうじやうの女にからかひつづけし
満二年小学校に教鞭きょうべんをとりて十五の春にしりぞく

父の業わざたすけて農事のうじや醤油しょうゆ売り附近ふじんの村落にや荷にひまはりつ
醤油しょうゆうりし代金だいぎんくれぬもどかしさ腹はらのたつまま廃業はいぎやうなしたり

わが村の豪農ごうのう齋藤源治さいとうげんぢ氏の家いへにやとはれ近侍きんじつとむる
酒呑さけのみの主人しゆじんに毎夜まいよつれられて亀岡かめおか附近ふじんの料理屋りやうゐまはれり
奥様おくさまと主人しゆじんの中にはさまれて苦くるしき立場たてまをあぢはひにけり

玉たまの井いの池いけに關かして村人むらぢの庄迫しやうしやくつよく窮地きゆうぢにおちいる
プロレタリアプロレタリア小作せうさくの父ちちは地主ぢしゆ等に小作田せうさくぢのこらずとり上げられたり
雇かはれし主家しゆけにいとまをこひながら村全体むらぜんたいと論争ろんしやうをなす
論争ろんしやうの結果けつがやうやくわれ勝ちかちて池いけの年貢ねんぐを村むらより収おさむる
弱よわければ踏ふみつぶさるる世よと知りて心こゝろの駒こまをたてなほしたるも

小作田せうさくぢも少すくなくなりてやむを得えず車くるまをひきて生活をなす
夜昼よぢゆうの差別さべつもわかず京都市きやうとしに薪かきの運送うんそうなしてくらせり
夕ゆふされば友ともだちのこらず夜遊よあそびびに出いづれどわれは車くるまひくなる
雪霜ゆきしもの道みちふみしめて真夜中まよなかに寒さむさしのぎて車くるまひきたり
雨雪ゆきゆめの日はことさらに苦くるしけれ車くるまのわだちいやおもくして
何故なにゆゑにわれかくのごとく不遇ふぐうなる家いへに生あれしかとかこちてもみし
筋すじも骨ほねもくだくるばかりの苦くるしさに隣家りんかの雇かはれびととなりけり
垣かき一重いちじゆうへだてし隣りんの百姓家ひやくしやうぢやに雇かはれ田ぢ作るわざにいそしむ

下僕 十五六歳の頃

凍柱こゝろたつ麦あはの田ぢに霜しもふみて肥料ひじょうをやれば手足てあしここれり
肥料ひじょう一荷いちか麦あはの田ぢにかけ帰かへるさに昇ある旭あしたのあたたかみかも
白白しろしろと霜しもおく野辺のべもかつぎたる肥料ひじょうの重おもさに汗あせにじむ肌かわ

藁をきざみ糠にまぶして牛にやる朝したしきうまやのおもて戸
 門をはづして牛を牽きいだした夕べの小川に追ひ入る夏
 朝夕にこきつかはるる百姓の下僕しもべのわれの牛に似しかな
 ものいはぬ牛とかたりて夕暮ゆぐれの山路やまじ淋しみしく柴刈りてかへる

霜柱しもじたてる朝に柴を刈る農家の下僕しもべはくるしかりけり
 山焼けの跡の枯木を刈りとりて村の男の子にどなられしかも
 ひとり立つ身分ならねば百姓の下僕しもべの業わざにいそしむ朝夕
 垣一重へだてて父母はありながら訪ふひまもなぎ下僕しもべなりける

近眼のおやぢが田芋とあやまりて梅干皿にもり食ふをかしさ
 まけをしみ強きおやぢは梅干が大好物と顔しかめ食ひぬ
 一皿の梅干を食ひて喉かわきやたらに水がぶがぶのめる
 このおやぢ丹波たんぱと名告りつつ力自漫で角力とりたがる
 近眼のおやぢを幸ひ掌に墨ぬりつけて顔にとびつきし
 日の暮か何だか顔がうつとしいなどと近眼が墨顔なでる
 手を拍つて笑へばおやぢ感づきてコン畜生奴と追ひかけまはる
 逃げながら縄ひきをけば足にかり近眼のおやぢどんとこけたり
 コン畜生もう料簡はならぬぞと血を出しながら地団駄を踏む
 生活に苦しき若き身ながらもいたづらのみは忘れざりけり

氏神の祭の太鼓をかつぎだし厠の中に打ちてしからる
 人魂ひとたまが出ると村中ふれまはし藪にひそみて灯をともしたり
 瓦斯燈かすいとうに青紙あおみはりてつき出せば石なげられて吾が顔傷つく

角力 十六歳の頃

金剛寺夜学にかよひて友がきと毎夜まいよ菘蕩しゆとう飯をたきくふ
 親の目をしのびて米をかくし持ち蕘蕩買ひて夜学の友と食ふ
 金剛寺栗山禅師に漢籍をならひをはりて経文をよむ
 棒よみに一切経ををしへられチンブンカンブン訳が分らず
 その意味がわからぬながら経文をなめらに読むぞ楽しかりけり
 法華宗妙見ほけしゆのばあさんに宗教心をそそられしわれ

初秋の山に柴かり角力とりて腰の関節かんせつまたもやいためし
 初荷ちまにふ事さへかなはぬ下僕吾は腰なほさむと越畑にかよふ
 越畑にかよふ夕暮愛宕山ふもとの森林にまよひて泣きぬ

夜嵐の吹きすさぶなる森林の闇にひと夜を泣き明しけり
 路とはむ人かげもなき深山路の秋の夕べは淋しかりけり
 東の空明けはなれ羊腸の小径つたひて村みしうれしさ
 越畑の接骨医者の棟はるか目に入りしばし嬉し泣きせり
 一本の杖を力にチガチガと山路たどれば腰のいたかり
 整骨医表の門をおとなへば子供と侮りはねつけ入れず
 涙声しほりてこんこん頼みこめば不承不承に門あけくれたり
 何をして腰いためたかと尋ねられ角力のかたみといつて嘸鳴らる
 これからは百姓の下僕の間際で角力とるなと声高にいふ医者
 今年の秋の仕事の間にあはぬなどといひつつ腰もみにけり
 チガチガとピッコひきつつ主家に帰り医者と言葉を伝へて叱らる
 腰痛をこらへしのびて重き荷をになひて秋を泣き泣きはたらく
 何時の間にか腰の痛みは止まりけり生命を的に重荷かつぎて
 忙しき秋の農業の終りし日間にあはぬとて追ひ出されたり
 追ひ出され家に帰ればたらちねの父は怒りてまた追ひ出せり
 腰いためながらもわれは辻角方飯より好きといひつつやまずも
 貧しさに昼夜はたらく若き日のわれは一しほ苦しかりけり

荷車十七八歳の頃

霜の夜の一番鶏に起き出でて凍てたる道を荷車曳き行く
 凍て道に足すべらせて土橋のうへより荷車もるともに落つ
 父と子が川底に落ちてさいはひに微傷だもせず神の救助か
 生活の資料の荷車破壊して貧しき世帯のなやみは増しぬ
 亀岡の寝しづまりたる町中を毎夜カラカラ荷車曳きゆく
 篠村のとろとろのぼり坂道を霜夜に汗して荷車を曳く
 大枝坂松風洞を出づるころ東の空はしらみそめけり
 松風洞東に出づればくだりざか車の轆やすやすころがる
 大枝坂七本杉のかげに立ち霜夜の汗を拭きつつやすらぶ
 真夜中を大枝の坂に車曳きて山賊共におびやかされたり
 夜から夜へ働きてえし利得をば一度は残らず山賊にとらる
 霜の朝も夏の真夜中も厭ひなく荷車曳きし若き日のわれ
 生活におびやかされて止むを得ず昼夜わかたず働きしわれ
 田を作るいとまいとまに柴を刈り車をひきて若き日はすぐ
 生活に忙しき身も歌を詠み句を作りつつ楽しき日ありぬ

音頭の声破らむとして鬻鬻とみなぎり落つる瀧浴び唄ふ
 瀧の音と声を競ひて咽を破り血を吐きしこと毎度ありけり
 七匹の狸の昼寝発見し鎌をふるつて二匹まで獲る
 柴の荷に狸ぶらさげ帰るさの月夜にあやまり山池に落ちぬ
 たそがれて柴担ひつつ墓の下ものをもいはず走りてかへる
 穂芒の風になびける夕まぐれ墓下道にきもをつぶしぬ
 臆病とひとにわらはれ腹立てど墓の下道何時もいやらし
 藪陰の辻の地藏に線香立ついやらしき道も恋許り通へり

初恋 十七八歳の頃

人魂の出る夜なりけり恋人の家にかよひて雨に追はれぬ
 うちつけにいふ言葉さへ口籠り恋には弱きわれなりしかな
 君恋ふといひよどみつつ高らかに歌を唄ひて軒端をさまよふ
 思ふ人の軒端にべつたり出逢ひつつものをもいはず惜しくわかれし
 労働の汗臭き肌をはずらひて君恋ふるとはいひかねにける
 プロの家に生れたる身は若き日も人恋ふるさへためらひにけり
 とりあげし秋の收穫ごとく地主に納めて喰ふ米なし
 まつしるな七分まじりの麦飯を塩鯛にて喰ふ小百姓
 大根は作れど残らず町に売りその代をもて米を買ひたる
 プロの家の若者のこらず友として農閑の日は荷車稼げり

夜遊 十七八歳の頃

小夜更けて夜遊びにあき帰るさのわが軒の柿ぬすむ人ありき
 柿の木の下にたたずみ何人とはば木くだる顔にあきれし
 思はざる富みたる人が柿ぬすむそのいやしさをあはれみしかな
 このことは誰にも云うてくれるなとたのまれ今にその名を出さず
 朝夕に顔を見合はす人ゆゑにかへつて吾のはづかしくなりぬ
 故郷に帰りて見ればその柿は玉の井のほとりに苔むし今在り

玉の井の池に盥の舟うけて綿入のままあそびけるかな
 冬の日の雪の夕べに盥舟顛覆させてあやふくたすかる

流れ来る川の木屑に鳶口をあてたるままに陥る濁流
 一二町押し流されて吾が命たすかりし時も鳶握りをりぬ

執着の深いをこと村びとにあきれられたり鳶口を見て
村用の鳶口なれば命にもかへて護らむこころなりけり

和一郎重太郎二人の友達に誘はれいたづら夜遊びのみする
今ならば不良少年といやしまれ感化院までのぞきしならむ
風呂岩といふ人の小屋を三方からゆすり地震といつはり遊びし
風呂岩は怒りくるうて戸をひらき竹箒もて頭なぐれり
雪隠に箒をひたし風呂岩にかたきうちとてて表戸こすりぬ

合図 十七八歳の頃

口笛を吹いて二人の友垣は夕べの門にわれを呼び出す
無理やりに咳払ひして外の友にしばらく待てと合図なしける
垂乳根の父にさとられつぎの宵咳払ひして頭なぐらる
口笛を覚られてより吾が友は下駄の音させ合図しにける
塵払ひ障子の穴より突き出してしばらく待てと合図の返事す
父母の寝息うかがひ裏戸あけて三人は西瓜畑に馳せ行く
月の夜の露に冷えたる西瓜をば地上に打てばぼんと割れたり
真二つに割れし西瓜の赤あかと月に匂へる夜半の楽しさ
石榴のやうにはじけし西瓜の実餓鬼のごとくにつかみ食ひけり
夜食ひし西瓜に腹をいためつつ泣顔おさへて草刈りにゆく
真昼間に父は野良より帰り来て西瓜盗まれたとはい顔せり
盗人をたづねて見れば吾が子ぞと知らぬ親父の顔のをかしさ
腹痛みやうやくなほりつぎの夜は友の畠に三人出でゆく
例のごと西瓜を割りてくらひあきその翌朝は又腹くだる
吾が父と友の父とがよりあひて迷惑相にはなし合ひをり
真夜中にお前がとつて食たのかと問はれて胸をとどろかす吾
知らないとこばみて見たれど何となく心をのき声ちぢみける
白浴衣西瓜の汁に染まりをりて言ひわけたたずあやまり泣きぬ
田に水をひかむと夜半に畦道をかよひて狸の奴につままる
遠の野に提灯見えて人のかほ声まできこゆる狸の仕業
吾が作る田の水口をふさぐ奴追はむと走りて小溝に落ちたる
漸くに溝はひ上れば月冴えて吾がそばかく狸あゆめり
こん畜生狸の奴めと追ひかけて再びもとの小溝に落ちたり
何処までもたたる狸と怒りつつ泥まぶれにて夜半家に帰る

悪友 十八九歳の頃

プロレタリヤ竹藪もため家の子は垣根の外の筍あさり食ふ
 垣外の筍ほれば悪友の太吉きたりて持ち去り行きぬ
 小幡川に水あびをればわが袂に糞まりおきて太吉逃げゆく
 くつくつと笑ひ太吉が逃ぐる見て川よりあがれば袂に糞あり
 糞こきし太吉の家に怒り行けばごろつき親父顎しやくりたり
 善悪によらない負けて帰りなば太吉は家に入れぬと親父言ふ
 大亀と名を知られたる侠客の俸の太吉のいたづら憎らし

丹波与作足長自慢で野の井戸をまたげしあとより石を投げこむ
 投げ入れし石に壘丸ぬれねずみとなりしをいかり与作が追ひ来る
 追ひかくる与作こはさに雪隠に逃ぐれば婆さん尻まくりをり
 用達の婆さんの尻に驚いてあつといひつつ倒れたる吾
 倒れたるところを与作追ひきたり餓鬼大将と頭けりゆく
 吾が頭けられし無念はらさむと与作のゆく手に縄はりにけり
 丹波与作縄に爪先ひつかけどつとばかりに路上に倒る
 正清をなぶるとは図太い子俵と与作がどなりまた追ひきたる
 正清の近眼をさいはひ生垣の中にひそみてやり過ごしけり
 生垣にひそみてあれば家の主兼さんが来て鍬の柄でうつ
 鍬の柄にうたれしあとの腫れ上しタンコブ一つ記念に残る
 ダンコブに繻帯をなし家に帰り父にはれて実状あかせり
 みかけにもよらぬ不良の少年とまたもや父になぐられて泣く

をりをりは村の戸長にたのまれて京都府令をよみきかせけり
 この村の節用中とたたへられ無学の村民にも教へけり
 貝祭文軍談落語に仁輪加など村人達に聞かせてたのしむ

白墨を持ちて寺門に楽書し栗山禅師の叱ごと浴びたる
 金剛寺夜学の席から追ひ出され矢鳥教師のもとに走れり
 矢鳥氏の寓居にかよひ毎夜毎夜日本書紀など教へられたる
 日本書紀日本外史とつぎつぎに御国学びにうつりし若き日
 国体のたふときことを知りそめて仏の道より神にすずめり
 産土の神に夜な夜なまゐるまうで貧しき父母の幸いのりける

獲鹿 十八九歳の頃

奥山おくやまに刈きりし紫むらさきの荷にを馬うまの背せの嶮けんをつたひて風に飛とばさる
 打越うちこしの赤あかずれ急坂きゅうばん柴しばになひ谷底やちふかくすべり落ちおちし初春はつしゅん
 谷底やちに柴しばの荷にもるともまくられてころころ団子だんごの足あしを傷やつく
 谷底やちに転ころもがるさまを友ともは見みてあれよと驚おどろくばかりすくはず
 救すくはむとすれどもあまりの急坂きゅうばんに友とももせんすべなかりしなるらむ
 道遠みちのほき山坂やまのぼりいくつ越こえながら奥山おくやまに柴刈しばりしわかき日ひ
 柴しばの荷には重おもたけれども負まけをしみ強つよきがままに汗あせして帰かえる

堂建どうたての山やまに柴刈しばるをりもあれ手負ておひの鹿かは峰みねわたり来こし
 刈きり上げし柴しばを野山のやまに捨すておきて一目散いちもくさんに鹿かのあと逐おふ
 手あを負おひし鹿かはたちまち新池しんいけに命限いのちかぎりに飛とび込みこみにけり
 新池しんいけの廻まわりを友ともととりまきてやうやう鹿かをうち殺ころしたり
 柴しばを刈きる友ともと鹿かをば担になひつたそがるるころ里さとにかへれり
 鹿かとりて帰かえれば父ちちは腹立はらたてて特種とくしゆになつたと吠鳴わいなりつけたり
 やむを得えず治郎松ぢらうまつの門かどにかつぎゆきて友ともと集こひて鹿かの皮かわはぐ
 鹿かの腹出はらだ刃庖丁やいばひらで断たち切れれば中なかより孕ひらみ児こあらはる夕暮ゆふぐ
 村人むらぢはよりつどひつつ鹿かの肉にくわかつをりしも獵師りし入り来きる
 後脚あひしに銃弾じゆだんの跡あとあるをみて吾わががうちし鹿かと獵師りしは責せむるも
 皮かわも肉にくも残のこらず獵師りしに奪あひとられ各おの各おの十錢じゆせん出してあやまる
 隠かくしおきし三貫目さんかんめの肉にくを柴しばの友ともといより集こひて平たいげにける
 鹿かの肉にくあまり沢山たくざん食たひすぎてその翌日あしたは目めの色いろかはる
 鹿かを食くたその翌朝あしたあさは天あまも地ちも森羅しんら萬象ばんしやう黄色わうじやくく見えけり
 犬骨いぬほねを折おりて獲とりたる牝鹿めしかをば獵師りしにとられて馬鹿ばかと嗤わらはる
 これからは殺生ころしせいしてはならぬぞと父ちちの眼光がんこうり声こゑはとがりぬ

転石 二十歳の頃

柴刈しばりに行いきてなぐさめ半はん分に尾上おのえの岩石がんせき谷間やまにころがす
 雷鳴らいめいの如ごとく岩石がんせきおとたてて宙そらをとびつつ谷間やまに落ち込こむ
 柴しばを刈きる老人らうじんの側そばに石落いしおちてはつとばかりに驚おどろき飛とび退ひく
 このことを区長くわうちが聞ききて怒おこり出でしもの処ところへ岩い上げといふ
 五ご六ろく人にん柴しばの友垣ともがきあひはかり区長くわうちの家いへに詫わびてゆきたり
 意地悪いぢわるき区長くわうちはなかなか承知しやうちせず交番かんばんに渡わたすと意地いぢはりにける
 五ご六ろく人にん区長くわうちのまへに合掌がっしやうしをがみたふしてやつとゆるさる

柴しばを刈きる爺ぢいさんの前まへに屁へを放はなれば怒おこりて木鎌きかまをふり上げ帯おびきる
 きられたる吾わがが帯おびやつとつなぎ合せ柴しばを担かかひて家路いへぢに帰かえる

この帯は如何してきたとたらちねの父にとはれて胸とどろかす
 またしても下手な相撲をとりしかといひつつ父は煙管でうちけり

夏されば野山に木の芽刈りとりて稲の青田に肥料と投げ込む

背輪 二十一二歳の頃

共有の野山に入りて青柿の渋しぼり取り町に売りゆく

柿の渋売りて小銭をまうけしと柴の友よりいやしまれける

柿の渋売りし金子で書籍買ひ仕事の休みに読みふけりけり

思はずも山の柴刈る松のしたに松茸三本見つけてよろこぶ

柴の荷に松茸つるしかへるさに兼さんが見て盗んだといふ

いかほどに辯解すれど兼さんは野山に菌は生えぬと頑張る

盗人の名をつけられて腹を立て現場に兼さん連れだちてゆく

松茸を抜きたる跡の穴示しやつとつたがひはれしうれしさ

○

五月雨のはげしき日なりき垣の外の竹の皮拾ひて毒蛇に咬まる

わが足を咬みし毒蛇をひきさきて傷所につくればすぐに治りぬ

百姓の賤のせがれは蜂に刺され蝮や蜈蚣にいつもなやみぬ

夏されば野川に箆を持ちゆきて鱒や鮒をあさりたのしむ

沢山の鱒をとりて村びとに漁師の子よとわらはれにける

魚とりをしても充分生活が出来ると友はあきれぬたりき

如何したらそれほど沢山漁りが出来るか教へてくれと友いふ

背の輪をおるせば魚はいくらでもとれるといつて笑ひ答へぬ

背の輪は何だと聞かれ臭いもの嫌ひな仏よと笑うて答ふ

魚を食ふよりも捕る趣味多かりき殺生するなど祖母は戒しむ

細溝に鱒つかまむと手さぐりに鱒とおもひ青蛇つかむ

おどろいてキャツと一声叫びつつ泥田のなかに尻餅をつく

手も顔も泥かけ地蔵となり變りドボンと池に飛びこみ洗ふ

飛びこみし池の古杭に尻をうちチンバひきひき家路にかへる

適齡 二十一二歳の頃

徴兵の検査に召され丈の高さ五尺二寸で乙種にまはさる

穴太より適齡の者四人ありていづれも丙種乙種のみなる

悪戯いたずらの太吉たきちは身の丈たけ四尺九寸さんしゅうじゅう山椒さんしょうは小粒こつぶでも辛いからいと威張りいばりぬ細こうても櫓かじの木き強いと腕うでまくわ負け惜おしみいふ太吉たきちをかしき

十八じゅうはちになりたる春はるよりあほら誌しといふ月刊げつかんに投書とうしよ始めぬ
狂歌きやうか狂句きやうく都逸みやび戯文ぎぶんを作成さくせいし月月げつげつかがさず投書とうしよしたりき
あほら誌しの刊行日かんぎやうじつをば待ちかねて唯一いちの慰安ゐあんと楽しみ暮くれしぬ

偕行社かいぎんしゃ冠句かんくの会かいに出句しよくして天位てんゐをもらひしときの嬉うれしさ

ひきつづき三年間さんねんかんに冠句かんく巻まき四十八冊しじゅうはちまいとりたる若わかき日ひ

度偏屈どへんくつ烏峰うほう宗匠そうしやう朝寝坊あさねぼう閑楽かんらく宗匠そうしやうに冠句かんくまなべり

百姓ひやくしやうの閑散かんさんな日は荷車かぐるまを曳ひきてかよへり京都きやうとと伏見ふしに

京都市きやうとしや伏見ふしの菓子屋かしやに原料げんりやうの種粉たねこなをいつも配くばりて行ゆけり

ひと袋種粉たいていこなの袋ふくろやぶれをり土つちにこぼして弁償べんしやうさせらる

同胞どうぱう 二十一歳じゅういちさいの頃ころ

何時いつまでも吾わがが父母ふぼは子こを産うむと友ともの一人ひとりは怒いかりてかたる

兄弟けいだいがせんぐりふえて厄介やっかいが俺おれにかかるとくやむ友ともかな

ありもせぬ親おやの財産ざいぜん兄弟けいだいにわけてやるのが辛つらいいと友ともいふ

よい年としをしていつまでも子こを孕はらむ両親りやうしん見みれば阿呆あほうらしと友ともいふ

その頃ころにわが母はは上かみも孕はらみましぬ案あんじて夜よな夜よな宮詣みやまうでせし

わが母ははの安産あんさん祈いのると友とも聞きいて君きみは馬鹿ばかよとののしり笑わらふ

一人ひとりでも兄弟けいだいふゆればいいぢやないかと友ともに語かたればフンとうそぶく

せんぐりに子こが出来できよつて貧乏ひんぱんの上塗うへまりするののが好すきかと友ともいふ

貧乏ひんぱんの上塗うへまりしてもかまはない子こを産うむ元氣げんきの親おやが嬉うれしい

百夜ひやくやを宮みやに詣まうでてつつがなく妹いもうと君子くんしうまれ落おちたり

妹いもうとの産声うぶごゑききて何なにんとなく心こころづよさを吾わが感かんじたり

生うれたる子この顔かほを見てわが友ともは腹はらだちまぎれに茶屋ちや遊あそびせり

厄介やっかい者ものこれほど沢山たくさん生うれては末すえおそろしいと悔やむ友ともかな

働はたらきもせない癖くせして吾わがが父母ふぼはまた子こを生うんだと悔くやむ友ともかな

秋あきされば松まつの林はやしにわけ入りて松葉まつはの焚物たの物の搔かきあつめけり

西山にしやんに松葉まつはをまかけばころと黄わうしめぢ松露しょうろあらはる楽たのしさ

手拭てふけいに黄わうしめぢ松露しょうろを包かみつつ松葉まつはの柴荷しばしに吊たりしてかへる

岩上がんじやうの松葉まつはを余念あまねんなく搔かきて足踏あしふみはづし谷やに落おちたり

水のなき谷に落ちこみ足痛め友にかつがれ家路にかへる
 足の筋いためて苦しみ整骨医平助爺さんに治療たのみぬ
 七十に余る平助爺さんは足をいぢつてますます痛くす

足いたため身動きならぬ晩秋を二月ばかり新聞借り読む

猿候栄次玉兔のお久の小説を読み無聊をなくさめにけり

趣味 二十三歳の頃

わが父の里なる川辺の船岡に伯父をたづねて神教を聞く
 わが伯父の佐野清六は妙霊教会布教師として教会所持てり
 帰るさは大堰の川を舟に乗り宇津根の浜に上陸なしたり
 何よりも楽しかりしは舟に乗り大堰の川を下るわかき日

千代川の今津の里に病む伯母を三日目毎に訪ね行きたる

伯母の家に到れば何時も稲荷下し病氣平癒の祈祷なしをり

稲荷下し祈祷も効なくわが伯母は遂に黄泉に入りしかなしさ

伯母も伯父も一子なくして失せければその靈魂を吾が家に祀る

反古紙の裏にをりをり絵をかきて不粹の父にどなられにけり

絵をかいて何益になるか極道奴と父はとがった声でたしなむ

飯よりもすきな絵なれどたらちねの父の言葉にしばしためらふ

父の眼をぬすみて土に木片もて色色の絵をかきて楽しむ

本を読むいとまがあれば百姓をはげめと何時も父は宣りけり

絵をかいて貧乏世帯がもてるかと小言のみいふ恨めしき父

読書して親の雪隠に糞たれぬ様になつてはならぬといふ父

絵をかくな本を読むなど日日に父と母とはわれに迫れり

世の中の大勢知らぬ百姓の父母にこまりし若き日のわれ

肝腎の勉強すべき若き日を車力と百姓にすぎしたるわれ

浄瑠璃をかたれば父は義太夫で生活たためとまたもいましむ

楽しみは残らず父におさへられ友とかくれて角力のみとる

わが父も若かりし日は都島と名告りをあげて角力とりたり

わが家は祖父の代まで三四代角力の行司をなしたりと聞く

屋根裏に行司の団扇三四本くすぼりたるがさしてありけり

行司団扇そつとり出し辻角力に使つてまたも父にどならる

真黒の行司の団扇を川水にひたして洗へばもろくもつぶれぬ

つぶれたる団扇に紙はり黒くぬりてそつと屋根裏にさしおきにけり

幸ひに父さとらねどびくびくと屋根裏眺めてしばし苦しみぬ

祭礼 二十三歳の頃

先祖より傳はる跨矢をとり出して池の真鯉をねらつて突き刺す
 玉の井の池にかひたる鯉一尾跨矢にさしてそつと捕獲す
 友の家にとりたる鯉を持ちゆきて麦飯の副食物に舌つづみうつ
 氏神の祭礼の日はちかづきて鯉一尾足らぬを父は見出せり
 わが友の弟来り何時の日かたいて食つたと父に告げたり
 わが父の舌うち聞きていちはやく頭かかへて逃げ出しにけり
 友達を頼みてこはこは家に帰り父の怒りをなだめてもらひぬ
 亀岡の伯母船岡の伯父きたり氏神祭りで父もおこらず
 秋祭ぜんざい餅に鯖のすし食ひすぎピーピー腹下したり
 ピーピーと尻のなる音鶴鳥の谷わたりよと友に嗤はる
 三四日すぐれば鶉の谷わたりすみてまたもや山に柴刈る

夏されば暑き野山に草を刈り稲田の肥料となして勤しむ
 炎天の夏を汗して造りたる米を地主にをさめてむなしき
 小作米と肥料の代をひきされば新年までは喰ふ米なし
 雪の道びしやびしや草鞋うがちつつ荷車ひきて米を買ひ食ふ
 荷車をひきて帰れば藁をうち夜業に草鞋あみつくりけり
 雪道の草鞋のよわさ日に四足うがてど帰りは半ば跣足なる
 晴れわたり道かわきたる春日なれば一足の草鞋一日たもてり
 十人の家族の生活ささへむと重き車をひきてかせぎぬ

楽しみに団団珍聞あほら誌を眼をも放たずしのび読みけり
 あほら誌や団団珍聞に投書して記事ののり来る日待つ楽しさ
 亀岡の雑誌公園と真砂誌をあがなひ投書なしてたのしむ

麦飯 二十三歳の頃

朝まだき霜の刀をふみしめて山野にはたらく農家の生活
 夜から夜へ働き通せど麦飯もやすやす喰へぬ百姓なりけり
 人情の紙より薄き世のなかに住む身は命の糧にくるしむ
 炎天の田にはたらきし汗の実の一つものこらぬ小百姓の冬
 慾望に限りも知らぬ地主等の願使に任せる小百姓なりけり
 何時までも算盤とれぬ小作百姓やめたく思へど術なき農村

不愉快な悩み抱きてわかき日を貧乏神に追ひたてられつつ
 このままに老い朽ちてゆく身なるかと悲憤の涙しぼりし若き日
 身辺をねらふ無情の風よりもおそろしかりし望みなき生活
 何時の日か世にたたむとは思へども丹波の農家は頭あがらず
 身辺をときじくねらふ死の神より恐ろしかりしは貧乏神なりき
 朝露の消ゆるがごとき人の身の命支ふる生活のくるしみ
 犬猫におとりしごとき貧乏の生活する身は牛に似たりき
 黙黙と朝から夜まではたらきて表飯に腹ふくらせにけり
 すこしばかり財産のある人びとは横柄面してわれを見くだす

神詣 二十三歳の頃

産土の神に夜な夜なまゐ詣で迷信家よとわらはれしわれ
 人の眼をしのびて夜な夜な疲れたる身を産土の社に運びぬ
 産土の夕べのやみの杜かげをしのびて一人宮に詣でし
 くらがりの産土の宮の杜かげの夜半にたたずむ女いやらし
 何人と声をかくれば白い歯を闇にあらはしホホと笑ひぬ
 笑ひたる女よくよくしらぶれば乞食に歩行く狂女なりけり
 この狂女髪ふり乱し吾が後を喜樂喜樂と追いつつ呼びくる
 小幡橋真下の闇に身をかくし狂女の影をやりすごしけり
 ガタガタと歯の根もあはぬ恐ろしさ命縮むる思ひせし夜半
 人臭い此処らに居るかと呼びつつ狂女は橋の上にひきかへし来る
 そろそろと橋の真下にせまり来る姿に恐れて川に飛び込む
 川の瀬の間にちらつく白波を目あてに命からがら逃げゆく
 失恋の果てに狂女となりにける彼女の姿すさまじかりけり

○

あくる夜半産土の杜に詣でみればまた黒き影一つたちをり
 神様にすまぬと思へど黒きかげの恐ろしきまま黙禱なしけり
 足音をしのばせながらさぐるごと腰をかがめて杜をはひ出す
 吾を世にたたせ給はば百倍の御恩返しを為さむと誓ひぬ
 霜の降る深夜神前にたたずめば駒のひづめの音聞え来も
 たくづぬの白毛の駒にまたがりて異様の神人近づくが見ゆ
 四辺みな闇なる神の清庭に白馬の神人見ゆるたふとさ

城趾 二十三歳の頃

形原神社正遷宮式に参拝し余興の武術に興じたる春

形原神社祭典のために亀岡の旧城内の開放されたる
 旧城趾銀杏のしたにたたずみてわれ回天の偉業をおもふ
 この城趾われの住家と口ばしり空想家よと父にしかるる
 青垣山四方にめぐらす亀山の城趾にたてばこころうごきぬ
 卑賤なる身にしあれども志如何で通はむと雄たけびなしたり
 暇あれば亀山城趾に忍びゆきて無言の銀杏といつも語れり
 古世町の伯母上の家に来るたび帰りは何時も城趾にたちよる
 吾が為に何かゆかりのあることくなつかしかりし亀山城趾よ
 洋洋と水をたたへし内濠の深きおもひの消ゆるときなし
 風流心夢にも知らぬ持主の千歳の老松伐るを惜しみし
 亀山の城趾の風致はことさらに丹波の国のほこりなりしを
 千引岩積みかさねたる濠ばたの石垣くたくさまを惜しみし
 城内に大八車ひき入れて珍石都へはこぶを惜しみぬ
 千年の老松櫓の大木を伐りはらひつつ櫓植系をり
 金にさへなれば記念の旧城趾風致なんかはかまはぬ持主
 田中家の所有となりて旧城趾いよよますます荒されにけり
 亀山の土族一同あつまりて形原神社に涙石はこべり
 三百年の亀山城趾は商人の手に入り土族の淋しさを思ふ
 せめてもの記念と亀山土族等は形原神社に巨石をはこぶ
 旧城趾落ちたる瓦の片あつめ城のかたちをつくりて遊びぬ
 旧城の記念と運びし涙石は亀山土族の真心のあらはれ
 いとけなき頃は雲間に天守閣白壁映えしをなつかしみけり
 角櫓一棟淋しくのこれるを心無き持主こぼてるみじめさ
 栄枯盛衰移りゆく世といひながら英雄の心事想ひて涙す
 待てしばし昔の城にかへさむと雄たけびしたる若き日の吾
 亀山の稲荷の祠様生のかげにさびしく建てるををがみし
 旧城趾荒れゆく様に憤慨し稲荷の祠にむかつてどなりぬ
 神ならばしつかりせよと稲荷社の前に地団駄ふみし若き日
 旧土族なりしなるらむ白髪のお翁杖にすがりてのぼり来
 老翁は銀杏の木かけにたたずみて感慨無量の青息をつく
 世が世ならこんなことにはなるまいと独言ちつつ涙こぼせる
 土族にはあらねど吾も憤慨し雑草の上に伏して泣きたり
 高台ゆ形原神社の棟を見て世のはかなさをつくづくおもひぬ
 石を割る石工の槌の音つよく胸にこたゆる夕べの城あと

穴太寺観音堂の法会の夜こころ合ひたる女とかたる
 穴太寺春の法会の無縁縁に有縁の女と語る楽しさ
 観音堂の裏の小暗き庭にたち堅く握りし手は熱かりき
 何となく胸をののきて一言も吾が言の葉は出でざりにけり
 感激の身をふるはせて彼の女吾と同じくもだし居たりき
 手を握り互に目と目をそらしつつ面はほてりぬ息ははづみぬ
 漸くに好きと小声に吾いへばにやりと笑ひてすと逃げてゆく
 或家の門口あけて彼の女伯母と語れる言葉ふるへる
 戸の外にそとたたずみてその女伯母と語れる様子聞き居り
 どうしてももう一言を語らねば心すまずと去りがてに居し
 屋内にパツと消えたる洋燈に吾あきらめて家路に帰る
 わが家に帰れと眼さえにつつ彼女のことのみ夢に見たりき
 女の名寝言にいひし翌朝父はほほゑみもらへと語る
 ほほゑめる父の面貌のはづかしさ面ほてりつつ知らぬと答へぬ
 お互ひの恋の佳境に入りしころ吾は修業のために村去る
 小北山南おもては恋ふる人のうからやからの住める里なり
 獣医学修業せむとて園部ゆく途中を彼女の家立ち寄り
 ○

立ち寄れば彼女の父はよるこびて風流談などなして夜明す
 一夜さの夢も結ばず小北山越えて園部へ吾は出でゆく
 二三日すれば彼女の玉の文盃盃の夜に会はむとしるせり
 この文を見るより盃盃待ちかねて牛飼ふ業も手につかぬ思ひ
 盃盃の月を待ちかねて故郷に帰れば伯母にさまたげられたり
 喜樂さんお前はすまぬ男よと彼女の伯母は吾をたしなむ
 伯母の眼の鋭きままに一言もかはす術なく惜しく別れし
 その日より叶はぬ恋とあきらめて吾は園部に立帰りけり

搾乳 二十三四歳の頃

われ二十三歳の夏田植すまし修学のため園部に出でゆく
 吾が従兄弟獣医井上直吉のもとにいたりて獣医学まなべり
 獣医学研究のかたはら牧場に牛乳しぼりていそしみにけり
 数頭の牛の手いれとくさかりと搾乳配達寸閑もなし
 寸閑を得し時医学を学べどもあまりくたぶれ頭にはいらす

獣医学研究を兼ね敷島の歌まなびせし惟平翁に
 南陽寺境内安養亭に宿し炊事一切まかなひにけり
 和歌の道搾乳のすべ飯をたく方法などをはじめて知りぬ
 園部町藤阪薬店にいとまあれば通ひて薬学研究をなせり
 藤坂の家に行くとして井上にいつも小言をいはれとほせり
 薬の名さへも読めない獣医師にあきたらなくて薬屋に学ぶ
 産科学生殖生理の研究は趣味深かりき若きわれには
 牛乳を野犬に与へて連れ帰り撲殺なして解剖を学ぶ
 猫鼠犬など解剖学のため見付け次第に殺して解きぬ
 獣医学研究なして自ら殺伐気分ただよひしわれ
 獣医学研究よして国学を研究せよと惟平翁宣らせり

麦時 二十三歳頃

一円の懸賞づきにて醤油五合飲みくらべせし友のつどひて
 眼をつぶり顔をしかめて五合の醤油をやつと飲み干しにけり
 咽喉かわき耐へがたきまま里川の流水がぶがぶ鯨飲なしたり
 冷水を幾許飲んでも咽喉かわく苦しき腹は布袋となりぬ
 布袋腹にはかにいたみ雪隠に一日数十度かよひつめたり
 一円の懸賞とりて農繁の秋半月を病床にくるしむ
 わが病める原因父は探知して大いにいかり床より追ひ出す
 腹下し瘠せおとろへし身を起し泣き泣き秋田の麦時なしぬ
 空想にふけりつ秋田に麦を蒔きつ後見ず高岸ゆ墜落をなす
 一文余の高岸の上より逆さまに山田に落ちて腰いためける
 足乳根の父に隠してびっこひき半泣き顔を秋田にはたらく
 いつの間にか腰部はしるく腫れあがり遂には父に発見されたり
 足乳根の父は驚き医師の家に顔をざめて自ら走せ行く
 赤熊の外科医来りて診断し不治の疵よと宣りてかへれり
 外科医師の言に少しは驚きしが勇気を鼓して灸すゑて見し
 三週間一日も欠かさず灸すゑて腰のなやみも全くなほりぬ
 初冬の空に麦田をたがやせば又腰冷えてチクチクいためり
 灸すゑてやうやく腰は癒えたれどつづいて腹水病を起せり
 津の国の草山村に灸の師を訪ひてやうやく平癒にむかひぬ
 灸の師の家に警官入り来り無免許医と曳きてかへれり
 灸術師老爺のあとを追ひながらわれも地黄の警察に行く
 灸術師二十五銭の科料金金の毒のまま弁じてかへる
 八十の年をとりたる老灸師二十五銭で放免されたり

米搗 二十三歳の頃

早魘かんぱつの稲田いなたに水をそそがむと昼夜ちゆうちやわかたず注水ちゆうすいをなす
 稲いなの田は白くかわきて土地ち亀裂きつ萎びし稲葉いなば見る目もさびし

用水井すいすい掘らむと水筋みずすじかんがへて深夜しんやに地下すいみやくの水脈みづさぐりぬ
 地の中の流るる水の脈みづさぐることに妙得みょうえしわれとなりけり
 村人に頼まれ地中の水脈みづを探りて井掘いればあやまたざりけり
 用水井すいすい掘る村人はかならずやわが指揮し待ちて水筋みずすじにあたる

百姓ひやくしやの夜業ちやげに每晚米を搗く脚あしのたるさにくるしみなやむ

どうかして楽たのしみに米の搗つける機械きかい發明はつめいせむと日夜ちちや焦慮しやうりょす

後前ごぜんに唐臼たうじゆを据おえ杵きねつけて米搗ちき見れど結果けつ良くなし

米搗ちの機械きかいの發明はつめい失敗しぱいし父ちちにしたられ村びとにわらはる

米搗ちの機械きかいの失敗しぱいしたるより米屋ちやいと綽名あだな付けられにける

このほかに二三さんの農具のうぐの發明はつめいを考案かうあんしたれどいづれも失敗しぱい

冬ふゆされば雪積ゆきづみむ小柴こしばかきわけて小柴こしばを刈りぬ百姓ひやくしやわれは

春はるの日は芝草しばくさを刈り車曳くるまひきき貧乏ひんぱふ生活しやうか平氣へいきに暮れ行く

秋あき来れば松山まつやまに入り落松おちまつ葉は箆へらに充みたして農のうを楽しむ

夏なつの日は仕事の暇ひまに溝川みぞがわに小魚こさなをあさりて樂たのしみみしわれ

毛布 二十三歳頃の頃

物ものごころさとりはじめて夜遊ちやうびに赤毛布あかけつと肩かたにかけて出いでたり

毛布けつと裏うらに小砂利こさじりや木の葉はの付着つやくせるを翌朝よくあさ見出みいでて顔赤あかめつつ

夜遊ちやうびに毛布けつとかかへて出る奴やつは男惣おとこ嫁よめよとわらふ友ともがき

二人ふたり坐ます夜辻ちよつじに人の氣配けはいしておどろき毛布けつと捨すてて逃にげたり

小夜こよ更ふけて毛布けつと拾ひろはむと潜ひそみゆけば跡方あとがたもなく梟うしゆの鳴なく

梟うしゆの鳴なく音ねも吾われをあざけること耳みみにさはりて腹はらの立たつ夜半よわ

梟うしゆの鳴なく音ね憎にくしとたたずめば木下陰こしたかげより細こい手てが出る

怪物けぶつが出でたかとはこは近ちかよれば毛布けつと要いらぬかと女の苦笑にがぢやうひ

箸豆しゆまめなあなたの心こころなほるまで毛布けつとあづかりおくと女の声こゑ

種こゝろ種こゝろと言いひ訳わけすれどあざ笑わらひ首くびを左右さゆうにふりつつすすり泣なく

この毛布けつとわたしが上げた真心まごころと泣なきつつ怒いかれる是非せひもなき夜半よわ

赤毛布あかけつとしきの田舎いなかの青年せいねんの恋こひにも涙なみだのある世よなりけり

秋されば村人交夜稲の番を夜な夜な辻の藁小屋になす
 秋の夜の長き徒然に畦の豆根こそぎにしてあぶりては食ふ
 藁の火にあぶりし秋の畦豆ははぢけたるまま焼けて残れる
 藁灰の中の焦豆選り出して食ふくちびるの真黒になりたる
 灰混り焼けたる豆を口にして黒き唾液をプツプと吐き出す
 稲盗む奴は居ぬかと木を拍つて野路をめぐる秋の夜寒し
 稲盗む人かげ見付け大声に呼べば稲の荷捨てて逃げたり
 稲盗む奴は百姓何人としらべ見れども手がかりさへなし

晩秋 二十三四歳の頃

晩秋の霜おく夜半の稲の番は火をたかずして忍べざりけり
 真夜中に眼さませば番小屋の外にひそ泣く女のごゑあり
 眠き目をこすり藁戸をひらき見れば毛布抱へて女立ち居り
 霜の夜の寒さ思ひてあづかりし毛布を返しに来しと女の言ふ
 ひとたびはうらみし女の心情にわれも涙に袖ぬらしたる
 一夜さを泣き明しつつ藁小屋の屋根におく霜も消ゆる熱さよ
 済まなかつたと詫ぶれば女も涙してすまぬはわたしと膝の上に泣く
 秋の夜の霜おく野辺の番小屋も一夜の夢は安かりにけり
 是からは外に御心うつつ世の仇花手折りそと女の愧ぢて言ふ
 今日よりは君一人をたよりぞと深く契りし野辺の朝明け
 いやなれば花として見む蕃椒と駄句れば膝にかみ付き女の泣く
 嘘だ嘘だ是はおだてた真実にとられちや困ると千弁万護す
 中なかに油断のならぬ男子よと笑みを残して女はかへりたり
 青春の血に燃ゆる身も将来をおもんばかりて二世は契らず
 二世契る細し女なきを啣ちつつ吾若き日は空しく暮れたり
 吾わかき時より神の守りけむいまだ女難にかかりしこと無し

靴音 二十三四歳の頃

牧場に一人寝ねたる月の夜をしのび入り来る女ありけり
 この女まだ十六の秋ながらいたくませたりつかつかもの云ふ
 つかつかともと言ふ女をばづかしみわが面ほてりてうつむきて居り
 この女二世を契れと泣きつきて帰らぬ夜半を井上入り来る
 井上は女の姿見るよりも此処には置かぬとわれを追ひ出す
 追ひ出されのめめ居るよな男かと啖呵きりつつ彼女の家に行く
 若き女に随ひゆけば其の家の老いたる母はわれをたしなむ

そんなこと知らぬ知らぬと云ひながら寢床の中にもぐりこみたり
 手に合はぬやんちや男といひながら彼女の母は夜具をきせたり
 靴のおと高く井上入りきたり吾を引張り牧場にかへる
 勉強をせなくてはならぬ年ごろでちと心得と井上が云ふ
 これからは心得ますと云ひながら吾うつむきて舌を出したり
 ぶんぷんと怒りて井上帰りゆく後より吾は腮をしゃくれり
 舌を出し腮をしゃくりし吾がわざを文助親爺がそつと見て居り
 文助は一部始終をまつぶさに告げたるらしき井上の面
 井上はそれより言葉あらたまり吾を先生先生と呼ぶ
 先生はあなたのことよわしは今書生と云へば井上空向く
 舌を出し鯉をしゃくるは俺よりも先生なりと井上皮肉
 何となく師弟の間折り合はず言葉の端にもかど立つが見ゆ
 このやうなやんちや男はたまらぬと井上弟を牧場に入れたり
 井上の弟徳はわれよりも一段ましてやんちやなりけり
 徳松をともし毎夜劇場に乞食芝居を見にかよひたり
 徳松を誘惑したと井上が弟のひいきばかりするなり

十六のをんなたちまち癡狂し喜樂喜樂とさけびまはれり
 母親は娘の病なほすため一度来れと呼びに來にけり
 てれくさいながらも女に会ひたさにいやさうな顔してついで行きたり
 恋しくて会ひたく思へるその矢先母の招きはもつげの幸ひ
 ゆきて見れば彼女は高き水枕頭に氷嚢あててさけべり
 喜樂さんが来てくれたよと母云へば彼女は忽ち笑ひ出したり
 井上が後を追ふかと案じつつこはごはながらしばし看病りつ
 喜樂さんこの娘をどうしてくれるかと母親お松の膝づめ談判
 いひほどく術も無ければやむを得ず医者になりたら妻にすると答ふ
 その言葉間違ひなくは安心とよるこび娘に云ひ聞かす母
 その日より娘の病つきつきに全快したれど母親会はさず
 母親になぜ会はさめとなじり問へば医者になつたら曾はすつくび振る

解剖 二十三歳の頃

飼犬が癡病なしてびつこひき百日余にして斃死なしたり
 井上は気管支炎と診断しわれは心臟系状態と断ず
 南陽寺の飼犬なれば境内の墓地に住職あつくはうむる
 斃れたる犬の病状さぐらむと闇夜墓地にしのびてぞ行く
 テーランをとぼして犬の墓を掘り解剖服にてメスふり廻す

第一に心臓部目がけて解剖刀ぐさりとさせば髪の手よだつ
心臓を解剖すれば糸状虫ウヨウヨとしてわきあたりけり
獣医術にわれは勝てりと会心の笑みを夜間にもらしたる墓地
テランに照らされ笑める吾が顔を雜僧便所ゆながめて驚く
心臓をえぐり出して新聞紙に包みふたたび死骸を葬る

きりとりし心臓を家に持ちかへり井上獣医の目の前に出す

井上は烈火の如いきどほりコン畜生とこぶしふりあく
診察をあやまりおきし井上がかへつて吾に毒つきにけり
コン畜生木つ葉野郎といひながら棍棒ふり上げなぐりにかかる
一斗の大豆みたせし桶を手に兇暴の棍棒受けとめにけり
うけとめしはづみに桶は顛覆し一斗の豆庭にちらばる
こびれたる豆を獣医と吾と二人つぶやきながら拾ひ集むる

病牛 二十三四歳の頃

牛畜の流行性感冒むらむらにありて井上往診いそがし

井上の留守に薬をとりにくる飼主にわれ薬をあたふ

重曹や規那末芒硝酒石酸調合なして十銭に売る

十銭にやつたと云へば井上は十五銭よと目をむきいかる

二銭ほどの薬を十銭に売つたのに何が悪いと抗辯をなす

猪古才な世帯知らずといひながら棍棒もちてなぐりにかかる

逃げながら麦畑の土をひつつかみ井上目がけて投げかけにけり

土埃目にかかりしにや井上はばたりとたふれ涙して居り

われもまた驚き如何にとたち寄ればこん畜生と怒りてなぐる

真清水をバケツに汲みて目を洗ひふくれ面して家に帰れり

約五里を隔てし和知より病牛の往診たのみ百姓来れり

井上はいそいそとして金儲けまた出来たりと急ぎ出でゆく

井上の母は来りて一石の蚕を棚に飼養してをり

急電によりてわが伯母郷里なる高屋の里にいそぎ帰れり

井上の母はわがため伯母なりきわが子を褒めてわれのみそしる

わが伯母の高屋に帰りしそのあとで二眠の蚕をもみつぶしたり

真夜中に井上和知より帰り来て棚の蚕をつくづくみてをり

おい喜樂えらい鼠が荒れよつた猫かりてこよとやかましくいふ

わが為せしこのいたづらを井上は鼠といひしにはつと落ちつく

真夜中に南陽寺の門をうち叩き猫借りたし和尚に言ひこむ
 真夜中に猫をかせとは不思議なりそのわけ話せと和尚は迫る
 やむを得ずありしことごと詳細に話せば和尚はふき出し笑ふ
 そんなことするよな男に寺の猫は貸してはやらぬと和尚は笑ふ
 いたづらを鼠と思てる井上も耄碌してと言ひつつわれ笑ふ
 わが声を聞きて寄り来る寺の猫をぐつと抱へて逃げ出しにけり
 喜楽さん解剖してはいけないよと和尚は大声あげて云ひけり
 解剖もしませぬ炊いて食ひませぬしばらく貸してと言ひつつ走る
 猫抱へ家に帰れば井上は何処の猫かとききりに尋ねる
 南陽寺和尚にかつて来ましたと言へば井上眉さかだてる
 南陽寺和尚にかつて来た猫は去なせと井上目をつる
 南陽寺の猫でも鼠はとりますよと云へばこの猫蚕食ふといふ
 井上の言葉の如くこの猫は蚕をむしやむしや食ひはじめけり
 井上はこん畜生と猫とわれを一度にぴしやりと杖にてなぐる
 流行性感冒の牛出来たりとまた真夜中に百姓きたる
 洋服に身をかためつつ靴の音たかく井上出でゆきにけり
 あくる朝ふたたび猫をつれ来たり蚕の虫をくはせて楽しむ
 わが伯母は早朝高屋ゆ帰り来て直はぬかたとわれに問ひをり
 直やんは牛の流行性感冒でどつかへ行たとわれ答へたり
 蚕食ふ猫をみつけてわが伯母は気をつけぬかと甲高にいふ
 知らぬ間に猫が出て来て知らぬ間に蚕をむしむし食たと答ふる
 井上の帰りし靴音ギウギウと聞きつつわれは牧場に走る
 留守番がなくては蚕も飼へないと伯母井上に妻帯すすめをり

歌会 二十三歳頃

井上の留守をさいはひ獣医服そと身につけ逍遙する町
 文助と徳の二人を牧場にやとひ入れられ小閑を得る
 家畜医範十六冊五千頁のこらずわれは浄写なしたり
 浄写せしためにや家畜医範をば大略暗記することを得し
 獣医学和歌の研究そのほかに冠句俳句に興味をもちたり
 十歳の岡田和厚氏ととして天神町の牧場に住む
 南陽寺楚玉禅師の長子なる岡田和厚は鋭敏な小児
 南陽寺に毎月歌の例会のひらかれわれも出席をなす
 惟平翁にはじめて国学をしへられ吾が国体の尊厳を知る
 耳遠き惟平翁は八十の年こゆれどもすこやかにおはせり

惟平翁に歌を学ぶと聞き知りて不粹な井上おこり出したり

腕力 二十三四歳の頃

牛乳の得意先なる本町の内藤菓子屋にいつもやすらふ
牛乳の配達をはればかへり路は内藤方に休むをつねとす
十六貫砂糖のつつみかつかむと共肌ぬいできばりかけた
二十貫の五斗俵米楽楽とかつげる自分とあなどりてかかる
中なかに砂糖の包みおもくして千辛萬苦やつとかつぎぬ
砂糖包かつぎあぐれば店員は両手を拍つて一斉にわらふ
十六貫の砂糖つつみにあらずして其実三十二貫ありけり
初めより三十二貫と聞きしならばこの砂糖包かつげざるべし
何事も人は気分で勝つものとの時初めてさとりたるわれ
主人なる内藤半吾氏とそれ以後は水魚の交り結びたりける
内藤氏四十一歳われはまだ二十三歳のわかものなりけり

町風呂にはじめて入りて軽石で顔面こすりいたみくるしむ
町風呂ゆ帰れば顔は真赤にただれて血さへにじみたりし
井上にきびしく破顔の原因を問はれて実状あかし笑はる
軽石は足のきびすを洗ふもの顔は石蝕であらへと笑へり
それ以後は井上獣医吾を呼ぶに軽石さんと綽名なしたり
軽石といはれて腹の立つままに巨石を運びて床にすゑたり
二十貫の土のついたる重石をすゑたるを見て井上おこる
コン畜生石をどつかへもつて行けこの軽石奴とどなりて止まず
軽石といはねば石を持ち出すといつて井上困らせにけり
これからは軽石なんかいはぬ故持ち出してくれよとやはらかに出る
素裸になつて石をばかつぎ上げ畳に落して床をぬいたり
虫の食た床板もろくもへし折れて石は床下に落ちて動かず
大工をば呼んでうせると甲ばつた井上の声に飛び出しにけり
常大工無理にたのんで連れ帰りやつと床板張りてもらひぬ
こんな奴書生に置いちやたまらぬと俄に妻帯のはなしはじまる

帰郷 二十三四歳の頃

南陽寺和尚仲人にて口人で西田のむすめ縫子をもらふ
二三日すれば新婦のおしろいはげて頬のあたりに黒あざが出る
くづものをつきつけられたと井上がぼやくことぼやくこと気の毒なりけり

井上は離婚なさむとあせれども早くも妻は懐胎してをりやむを得ず妊娠のため泣き寝入り抱き寝入りて終に相和す新嫁の書生あつかひしよるのが癢にさはつて水桶かやす狭き庭水に浸りてはき物をぬらしたりとて新嫁泣き出す井上の徳帰り来て乱暴なことをしよつた俺もするといふこの嬢は大体おれの氣に喰はぬ兄の妻でもいねといふ徳往診ゆ帰り来りし井上に縫子は泣きつきうつたへて居る弟の徳を打たずに井上はわが頭辺を杖にて三つ打つ前額に凸凹出来たそのままに故郷に五里の道逃げかへる

牧場 二十三四歳の頃

園部より逃げて帰ればわが父は額の凸凹眺めておどろく園部より五里の夜道を逃げ帰りほろりとなつた吾が家の軒凸凹は如何して出来た直吉に叩かれたかと父は問ひけり実状をあかせば父は憤慨しせがれの頭を打ちよつたと怒る親でさへ打たぬ頭を直吉奴料簡ならぬと雄猛びなしをり腹立てば煙管や棍棒で打つ父が腹立ちまぎれにこんなといふともかくも様子はあとでわかるから今日は休めと宣りて野に行く大切な息子を打つた直の奴もつかへさぬと父雄たけびすこの夏は大旱魃ぢや幸に稲田に水かへさせんとよるこぶ豎釣瓶水汲む途端に足場はづし井戸に陥り両腕ぬきたりその時にぬきたる疵が六十の今になつてもものいふ苦しさ

搾乳や配達出来ぬに困り果て叔父の清六を呼びによこせり叔父なる佐野清六いろいと父をなだめて吾を連れかへる井上の家にかへれば夫婦ともプリンと面をふくらしてゐる馬鹿らしいもう俺はいぬと言ひながら闇夜に館を駈け出しにけり吾が叔父も従兄弟井上直吉もおどろきあとより追つかけてきたるいち早く闇にまぎれて藤坂の薬店に入りてひそみゐたりき奥の間にひそみてをれば吾が従兄弟叔父諸共に藤坂に来る藤坂の主人と叔父と井上と店の間に坐し論戦つとむる藤坂はわたしを医者に仕上げると気焔萬丈あたる術なし夜を更かし談の結果うち解けて再び牧場に立ち帰りけり

獣医 二十三四歳の頃

あさまだき籠をかつぎて学校の堤に生える露草を刈れり
 露草を腰もたわわに刈りつめて日出づる前に牧場に帰る
 牧場に入りて牛乳搾り取り絹布に濾して町にくばりゆく
 文助は牛に餌をやり徳はまた園部以外の村むらまはる

牛乳の売り余りをば持ちかへり犬に食はせつわれも飲みつつ
 牛乳の茶漬こしらへ日に二升ばかり毎日飲みたらひけり
 野良犬に乳をねぶらせ連れかへり叩き殺して解剖をなす
 骨一つのこらず肉をこそげおとし犬の骸骨床に置きみる
 犬の肉砂糖と醤油にて熟煮して附近の子供と共に食ひたり
 牛肉といへばよろこび子供等はわれともろとも舌鼓うつ
 犬も猫も鼯も鼠もことごとくわが解剖刀にたふれぬ
 四つ足で食はないものは炬燵ばかりと得意になつて鼻うごめかす

年明けて明治の二十七年となり日清戦争はじまりにける
 井上は従軍獣医に呼び出され吾は船井郡仮獣医となりぬ
 井上の古い洋服ばさばさとまとひて屠牛検査に出で行く
 警官をともし木崎の屠牛場にいたりて打診聴診をなす
 この牛は無病といへば牛肉屋屠者に命じてたたき殺しぬ
 皮を剥ぎ料理をすれば二貫目程肉腐りをり捨てさせにけり
 二貫目の肉の代償してくれと俄獣医に牛肉商がいふ
 このやうな大きな物を打ち殺す獣医はいやだとふとおもひけり

生業 二十三歳頃の頃

次の日は牛狂ひ出し荒れまはり人を目がけてつつき来る
 やうやくに大勢よりて暴れ牛おさへてすぐに撲殺なしたり
 屠牛者はその夕べより牛のごとうなり苦しき十日目に死す
 何人も牛が憑いたと口口に語るを聞いて気がわるくなりぬ

半月ののちに井上四師団ゆ不合格にてかへりきたれり
 井上のかへりし日より獣医学研究ひたとおもひとどまる
 牧畜を生業とせむとそれよりは牛乳搾取術にいそしむ
 デボン種やホルスタイン種いろいろと乳の研究はじめたりける
 新聞や戦争実記に読みふけり獣医研究やめてたのしき
 和歌冠句狂歌都都逸に興味をもち搾乳の外は筆もちつづける

文助や徳をともなひ町に遊び明け方かへれば牛は出で居り
 十頭の牛は残らず麦畑に出でて麦の穂ぐいぐい食てをり
 麦の穂の出かけたところをぐいぐいと牛奴は食つて朝寝してをり
 他の人のつくる麦畑食ひあらし農夫の家にあやまりに行く
 麦の穂を食つた損害賠償を吾が月給にひきさられたる
 三月分の月給出してもたらぬ程牛の奴めにくひ荒されたり

逃牛 二十三四歳の頃

乳牛はのこらず天神山に入り逃げてかへらず搾乳出来ず
 そのためにその日の朝の配達はやめて得意をあやまりまはる
 文助と徳と三人天神山にのぼりてゆふぐれ牛つれかへる
 一日のあひだ十頭の牛さがしくたぶれはてて搾乳出来ず
 乳房凝らし牛はもうもうなき出せば仔牛放ちてみなのみせけり

往診ゆ帰りし井上これを聞き棍棒ふりあげ追ひかけきたる
 いちはやく惟平翁の住みたまふ安養亭に逃げ入りにけり
 惟平翁驚きたまひ喜三郎何して来たか顔が青いと宣らす
 今日の日もありしことも紙に書き見すればウンとうなづき笑ます
 これからは牧畜なんかよしにして国学勉強せよと宣らしぬ

妖怪学膝栗毛など読みふけり藤坂内藤両家にあそべり
 ときどきは妙霊教会にかよひつつ神の話の聞きてたのしむ
 月次の祭日かならず教会にいたりてわれは講演をなせり
 吾が叔父は教導職にならぬかと言葉つくして何時もすすむる
 叔父もまた妙霊教会布教師を拝命しつつ伝道なしをり

信仰 二十四歳の頃

妙霊教会に詣で奥歯臼歯の劇痛を封じてもらひ信仰に入る
 造化三神天照皇大御神あさゆふいのる妙霊教会
 妙妙をいくたびとなくくりかへし信徒とともに神前にいのる
 十三歳父と本部に詣でしがふたたび叔父と二十四の年詣でぬ
 布教師の叔父に誘はれ兵庫県春日江村の本部に参詣したり
 妙霊教会本部に詣れば教祖なる山内教主布教師になれと勧む
 勢至翁の言葉にわれは面喰ひ熟考しますといひてわかれし
 教会の教導職のいづれもが現代ばなれしたるを忌みし

布教師になれば吾も亦かくなるかと思へばつくづくいやになりたる
 勢至翁の言葉につきてわが叔父は教師になれと勧めてやまず
 学校の教師嫌ひて労働者になりし吾にはもとより意志なし
 惟神神のをしへはこのめども布教師だけは御免とこととはる
 どこまでも神信心はいたしますおゆるしあれと逃げ帰りたり

獣医なる従兄弟井上直吉は神に詣でてかむがかりとなる
 井上に憑依なしたる精霊は人間以下のものにぞありける
 野天狗や野狐狸に憑依されかむがかりよと誇りみたりき
 父も叔父も叔母も従兄弟もことごとく妙霊教会の信仰者なりき
 荒れくるふ神憑状態ながめては信仰心もつすらぎてゆく
 数年後に獣医井上直吉は精神異状をきたして死せり

我が国の神道宗教の大方は皆このやうなものばかりとおもふ金儲け待ち人縁談病
 なほしそんなことのみしてる教曾

ありがたいあ有難い妙妙と百萬だらりくりかへす信者
 神前にドンドン太鼓をうち鳴らし妙妙と拜む布教師
 水害に遇うても妙妙親死ぬも子死ぬも妙妙妙霊教会
 われもまた隣の家が焼けた時妙妙と祈り嘸鳴られにける
 何が妙だ他人の災難見ながらに馬鹿にするなど天窓なくらる
 妙妙と祈つてをるにあざけると誤解をまねく妙妙教会

妙妙 二十四歳の頃

わが父は家に祭壇あひもうけあした夕べに妙妙と宣る
 村人に妙妙さんと綽名され若き自分は恥ぢらひたりけり
 齒のいたみ封じて呉れた神様も妙妙だけはいやになりしなり
 わが村に五人の妙霊新信者父が宣伝のために出来たり
 月次祭に祝詞称へに廻れよと父にいはれて困り果てたる
 何よりもはづかしいのが一杯でどうしても口から妙妙が出ず
 天津祝詞神言ばかり奏上し妙妙はいはず逃げかへりける
 本部より岸本布教師巡教のためにきたりて布教師すすむる
 岸本氏のすすめによりて吾が父の布教師すすむることの辛さよ

故郷の穴太にしばし帰りゐしがまたも園部に逃げ出してゆく
 園部町藤坂方にゆきみれば主人は妙妙さんとからかふ
 園部にも妙霊信者数十人あれど一つもろくなものなし
 内藤の家に到りてやすみをれば河内十人斬りの歌うたひ来る

十人斬りの歌おもしろく門芸者のあとに終日したがひてゆく
 村村を従きまはりつつ夕暮に腹をへらして叔父の家訪ふ
 叔父の家にいたりて夕飯請求し一夜泊りてまたすすめらる
 おまへならきつと立派な布教師になると教祖が宣らせしといふ
 又しても叔父の勧めのうるさに朝未明より逃げ出しにけり
 心短気な熊太郎弥五郎十人殺して名を残すと吾はそれより唄ひつづけり
 十人斬りの歌をうたひて藤坂の主人にきつくどなられしわれ
 人斬つて名を残すやうな奴の歌うたふ奴は家へ出て来なといふ
 ごもつとももうこれからは来ませぬと向ひの内藤方に出でゆく
 内藤の菓子屋に入りておもふさま雇人等とうたひあきたり
 翌日もその翌日もおなじ歌うたひてつひに内藤氏に怒らる

止むを得ず惟平翁のもとにゆきふたび和歌の講釈をきく
 来年は獣医試験を受けぬかと井上来りしきりにすすむる
 畜生の医者になるより人間の医者がましだと吾こたへたり
 井上は勝手にせよと言ひ捨ててポンポン怒りかへつてぞゆく
 井上のかへりし後で諸手組みしばし思案にくれてゐたりき
 獣医試験はねつけ見たれど何となく惜しき心地ししばし考慮す

試験 二十五歳の頃

獣医学断念したれど農商務省獣医試験に出る気になりぬ
 十九回獣医学試験を受けむとて京都府庁に立ち出でてゆく
 受験生五十四名のそのうちで学術試験の合格者五人
 二番目に合格したれど蹄鉄術実地試験にあわを食つたり
 ひとたびも蹄鉄術をまなびたることなき吾には少し無理なる
 十九回の獣医試験の費用とし金一円をおくりし井上
 一ヶ月三円支給の約束を三年つとめて一円くれたり
 このうへもなく吝嗇の井上を猿喰はず柿とぞ人はそしれり

獣医試験あぶなしとみて京都府の巡査採用試験をうけたり
 萬一のためにと京都監獄の看守の試験をつづけ受けたり
 獣医試験不合格よと村びとや父に言はれて顔すくめたる
 京都府庁監獄署より封書きたり父はおどろき顔をあくせり
 監獄に呼ばれる様な悪いことしたかと息をはずませる父
 やや胸に動悸打たせつ封書きれば巡査も看守も合格してをり
 一つの身二つの役所に仕へられず俄に病氣と届け出したり

牧畜の事業に一生をおくらむと京都九条の牧場に入る
 数百頭の乳牛につきいるいと深き研究をかさねたる夏
 京都市の牧場を辞し園部町にふたたび来りて薬学をまなぶ

満庵砦 二十五歳の頃

満庵砦さぐらむとして南桑田船井両郡の山かけまはる
 赤禿の山よぢのぼり黒き岩を鑿にてかきとり満庵とよるこぶ
 朝夕を山かけめぐり手や足にかすり傷してなほ倦まざりき
 この頃の喜楽は如何かしてゐると村上信夫氏あやしみて問ふ
 満庵砦みつけて一つ金儲けするのといへば村上氏うなづく
 喜楽さん俺も一緒に行かうよと慾にとぼけた村上氏いふ
 村上氏ともなひ握飯もちてあたりの山山かけめぐりたり
 船岡に満庵砦が出るとききて妙霊教会のうらなひを乞ふ
 わが叔父の主管してゐる教会は満庵出るとの神示なりけり
 満庵が出るとの神示に兩人はちからづよくも山かけめぐる
 断岸をいふみはづして村上氏数十間の谷底に落つ
 村上氏落ちたるさまに驚きてわれも谷間にかげ下りけり
 かけ下るはづみにあわて尻もちを尖りし石に幾度かつきぬ
 石くれに尻を傷つきちがちがとみざるが如く溪間に下りゆく
 よく見れば村上信夫氏谷底にほほ笑みながら休らひてをり
 別状はないかと問へば村上氏身軽のおかげで怪我なしといふ
 断岸ゆ落ちし村上怪我もせずわれはかへりて尻を傷つく
 尻の傷次第次第に腫れあがり歩みもならず痛むくるしさ
 谷底にわれはうごめき村上氏は救援たのむと叔父の家にゆく
 三十町の山路をたどる村上氏の短き足のはかどらぬかな
 村上氏去りたるあとの淋しさを地獄に落ちし心地なりけり
 待てどまてど村上来らず救援の人身もなく夜は更けわたる
 村上氏叔父の家にも知らさず馬鹿らしいとて家に帰れり
 約五里の夜道を村上げてくくと知らぬ顔して穴太に帰る
 待てどまてど人の来らぬかなしさに泣きわめく声谷に訝す
 やむを得ず数十町の谷路を川辺の道路にはひ出したり

薪つみてゆく車あり朝あけをわれ木かげより呼びとめてみし
 呼びとめし男は驚きふり返りわが顔眺めてあつと叫べり
 よくみれば従兄弟の佐野倉吉と知りしうれしさ涙こぼるる

わが従兄弟道のかたへに車おきて叔父のやかたに負ひてゆきけり
 わが叔父の妙靈教会にこもらひて負傷の平癒日夜に祈る
 やや少し痛みとまればいらだちて杖つきながら帰り路につく
 五里の道歸りてみれば足腫れて十日余りもうち伏しにけり
 わが足の病なほりし夕暮を村上方へたづね行きけり
 喜樂さんお前は狐か奴狸か年寄りのわしをだましたと怒る
 あまりにも腹立つままに谷底に捨て歸りしと村上氏答ふ
 お前こそ友の負傷を知らぬがに不人情よとわれはなじれり
 みせしめのために谷間に捨ておいて歸つてやつたと無茶ばかり言ふ
 不足いふつもりで村上訪ぬれば逆襲されてギヤフンとなりぬ
 満俺の失敗ばなし村中に村上の口よりひろまりにけり
 村びとはわれを満さん満さんとあざけり半分あだ名つけたり
 貧乏になやみしわれは千金を一獲せむとて尻をわりたり
 満俺はいふも更なり金銀砵その後はさがす気にもなれなく
 わが友の和一來りてまた山へ満俺さがしに行こかとからかふ
 満俺といはれる度にはづかしく顔あからめてうつむきにけり
 ありもせぬ金を使ひて山かけり遂には尻に傷をうけたり
 教会の神示もあたらすいたづらに山をかけりて怪我したるのみ

開業 二十五歳の頃

ラムネをば製造販売せむとして園水社なる会社をおこせり
 酒石酸単舎利別や硫酸やその他の薬でラムネをつくる
 薬学を研究の結果飲料水ラムネ製造の技術をさとりぬ
 硫酸を単舎利別とまちがへてぐつと呑みほし喉を焼きたる
 すぐさまに単舎利別をがぶがぶと呑みて硫酸の害をまぬがる
 単舎利を沢山のみて喉かわき水二三升をたちまちに呑む
 そのために少しく喉と舌あれて六十の今に声かすむなり
 ひと夏はラムネ製造販売にくれて大なる欠損をなす
 算盤のうへでは利益ありながら呑みたふされて約り損失
 働いて損をするよなラムネなら売らぬがましと機械まで売る
 二百円出した機械を見たふされ三十五円で人に売ったり

霧の庄上仲儀太郎氏相ともにあたらに牧場建築を為す
 また別に穴太で上田正定氏村上氏等と牧揚をひらけり

このときは明治二十九年の一月一日の開業なりける
 霧の庄の牧揚開始も同じ日にあたりて五里の道をはせゆく

一ときに二つの牧舎はつとまらず上仲一人にまかせおきたり
 雨の夕べ雪の朝もいとひなく乳をしぼりて近村に売る

相聞 二十五歳の頃

真夜中に雪踏みわけて想ふ人の家にかよひぬ二十五の春
 二十五の春迎へども初初しく子供をやうだといへる彼はも
 あまりにも人目の関のたかければ小暗き藪の細道ゆかよふ
 ふつくらと肥えたる彼女の白き顔闇の夜半にも目の前に浮けり
 につこりと笑める彼女の面ざしに暫し忘れぬ貧しき生活も
 親と親の許しをうけてあからさまに添ひ遂げばやと手を握り泣く
 朝なさな得意に牛乳配りをへて少しの間さへ逢ひて楽しむ
 田舎にはたぐひまれなる美人よと噂聞きたび胸とどろきぬ
 吾が外に彼女を恋ふる人あらば如何にせむかと心いためし
 色白きか弱き女はめとらせじと叱言いひ出しぬ頑固なる父
 わが家は百姓なれば尻ふとく色黒き女が適すると父いふ
 たらちねの父の言葉に叛くべきみちはなけれど忘らえぬ彼女よ
 恋といふ味はひ彼女に逢ひてより深くも深くもさとり初めたり
 牧場は稲田隔ててむかひあへり朝夕遠く見合ひてほほえむ
 玉の緒のいのちの綱を握りあひし二人のなかに雲霧もなし
 今しばし待たせ給へよひとり世に立つとき来れば晴れて添はまし
 覚束なわが独立をたのしみて待てる彼女はいとしかりけり

紅筆 二十五歳の頃

大ぞらの月に薄雲かかるごと二人の仲になやみの湧きぬ
 朝夕に彼女の面の悩ましさ見るわが胸は裂けなむとせり
 悲しみの極みは恋と聞きぬれどかほど辛しとおもはざりしよ
 咲き匂ふこころの花は夜嵐にうちたたかれて散らむとぞせし
 そよと吹く風にも散らむ桜木の花にひとしき恋となりぬる
 春の夜の月に匂へる桜花を手折るとしのぶ浮かれ男の腕
 かにかくに独り立つ身にあらざれば暫しさかりて時を待たなむ
 花匂ふ月も朧の夜なりけり暫しさかりて時待たむと誓ひぬ

君と今別れて住むはつらけれど末のためよと抱き合ひて泣く
 抱き合ひて落す涙の雨の露に二人の真心かがやく月の夜
 誓ひてし彼女を浪花に送りおきてわれ牧場に朝夕いそしむ

彼女よりきたる玉章をひらき見て若きころはときめきわたる
手紙などかならず送りましたまひそと彼女より来る紅筆の文
二ヶ月の間隔日に文おくる彼女のやさしき心根に泣きぬ

青天の霹靂二ヶ月半のち彼女の手紙におこる低気圧
玉章を披きしてみれば手も震ひ色あをざめて齒の根もあはず
父と姉の言葉にそむけず結婚の日に入水すと震へる手の跡
あたら世に命捨つるには及ばじとなだめすかして返し文送りぬ
若者われものあはれをさとりてゆ心の空に雲たち迷ふ
あきらめてみむと幾度思へどもむらむらもえたつ胸のほのほよ
身も魂もやきつくされむおもひにて青息吐息月にかこてる

名残 二十五歳の頃

懇切な姉の依頼の手紙みていのちの恋を捨てしわれかな
男らしく恋は捨つれどどこやらに名残惜しさの背骨がいたむ
垂乳根の父は吾が子と提げくらべしたりといひて憤慨なし居り
恋人を他人にとらるる弱き男末の見込みがたたぬと父いふ
遠くともみづから行きて結婚を破りて来よと友そそのかす
恋びとをとらるること弱虫は青年会をのぞくと友いふ

牛乳の得意が大切一朝もかかせぬわれの身こそつらかり
恋愛と事業と二つくらべあひ吾はいのちの恋を捨てたり
貧しければ恋もかなはぬ世の中と知りて朝夕事業にいそしむ
恋捨てしこころの苦しさひねもすの業をはりて浄瑠璃学ぶ
夜な夜なに吾妻太夫の許にゆきて浄瑠璃稽古友となしけり
浄瑠璃の恋の文句につまされてわれ時折に忍び音に泣きぬ
黄金の万能力の社会には南瓜も美人をめとりて澄ませる
地位と金とばかりが結婚する世は今業平の君ももてなく

相思 二十五歳の頃

俳諧の席にまみえし十七の女性と視線のあへる夕暮
もの言はぬ彼女の心臓ながら吾に会へりとほほゑみてかへる
大井神社祭礼の夜半に逢はむものとたそがれかけて橋の上待つ
彼の女母と妹に手を引かれ吾に横目をむけてとほりぬ
もう駄目だ今夜は神の御利益が無しとあきらめすこすこ帰る

二三日たてば彼女の玉の文鳩のごとくに飛び入りにけり
封切るもおそしといそぎ見る文の墨色かをる濃紫かな
紅筆のあとすらすらとなまめきて若き男の子の血潮湧き立つ
若き女の文見てしより奪はれし恋の恨みもうすらぎにけり

朝夕に牧畜業にいそしめどもおもひせまりて溜息つきぬ
奪はれし恋の面当て文を見てこころの泉にほこらひの湧く
富豪の家に生まれし彼女等のわれに添ふかと胸は高鳴る
提灯に釣鐘の譬へまたしても破れはせぬかと悩ましき朝夕
形ある宝を愛づる世の中にむづかしきかな貧者の恋路は

学問や知識なくとも富者の子は人の恋までうばひてほほゑむ
神聖の恋愛なりせばかたちある宝も塵のごとくなるべきを
ゆるしあふ互ひのこころ打ち消して終生泣かず無理解の親
生の木を裂かれし恋のわが身にはまたわづらひぬ彼女の上に
プロの家に生れしわれとあなどりて相思のなかも呉れぬ親達
相想ふこころは深き霧の海へだててなきぬ晴れまなきまま

柿みのる秋の夕暮美装せし彼女の母は吾が家訪ひ来ぬ
喜楽さんの家はここかと訪ねられはいと答へて座蒲団を出す
彼の女御免と言ひつつ座になほりわが面つくづく眺めてほほゑむ
親切にお世話下さる　の母です貴方に頼みたいといふ

留守　二十五六歳の頃

何ことも知らぬと云へば彼の女白ばくれなと吾が背をたたけり
眉目清秀立派な貴方は青年よ娘が好くも無理ないとわらふ
わたしこそ三十七で未亡人なれど遺産でやすしとかたる
立派なる青年なりとて無財産の人にはやれぬと切り出す母親
農村の或る富豪に結婚の約束あれば切れてくれと言ふ
その母の言葉にあきれしばしの間ただうつむきて黙しみにけり
うつむきて黙してあれば故知らぬ涙綱辺にほどぼとつたふ
母親は泣いてゐますか気のよわい貴方は男と吾が涙拭く
慇懃な彼女の母のたのみごとそむくすべなく三行半かく
離縁状ふところにしてこの女いそいそ帰る姿うらめし

富豪の農家に牛乳配りゆけば彼女はそこに嫁ぎてありけり
 家人等は五月田に行きて只一人彼女は留守を守りてありけり
 牛乳は虫が好かねど恋ひ慕ふ君に逢ひたさ牛乳取ると女のいふ
 三合の牛乳呑んだかほをして小便壺に捨てるといひけり
 蠟螂のやうな醜男を夫に持ちこの世がいやになりしとて泣く
 から国の果ても厭はず吾を連れて逃げてくれよと駄駄こね困らす
 なにことも因縁づくときとあきらめて辛抱すれば時来るとさとす
 なつかしい貴方のお顔を見た上は半時の辛抱も出来ぬとて泣く
 青春の血潮にもゆるわが身には彼が言葉にほだされて泣きぬ
 泣きつかれくどかれしそのたまゆらを吾が生命さへやりたく思へり
 わきたつる胸の血潮をおししづめ声くもらせて彼女をなくさむ
 玉の緒の生命の恋を捨てし身はまたもや事業に心ひかるる

逆耳 二十五六歳の頃

門口に人の足おときこえつつ彼女の夫かへりきたれり
 牛乳屋さん吾が家に入りて一時間たちしと夫は何気なくいふ
 あまりにも草臥れ果ててしばしの間やすみましたと言葉の綾織る
 何気なく彼女に言葉あらためてこころひかれつ門を出でたり
 朝なさな彼女に逢ふをたのしみに程遠き道を牛乳くばりゆく
 牛乳持ちてゆけば彼女のかげもなし逃げ帰りしと家人は言へり
 あくる朝牛乳配りゆけば仲人が家人とひそひそ話してをり
 吾が顔を睨めつけながら仲人は青瓢単と他所事にのしる
 富豪の当家をいとうてかへる奴先が見えぬとのしる仲人

あまりにも耳の痛さに駈け出せば牛乳屋待つたと親爺がとめる
 牛乳屋さんあわてて去ぬに及ばないやすんで帰れと親爺さんいふ
 てれくさいながらも縁に腰かけて仲人の罵り聞かされにけり
 牛乳屋さんまあ一杯と言ひながら親爺盃われにさしたり
 人言に聞けばお前はあれの恋人と聞いたがどうちやとなじる仲人
 そんなこと夢にも知らぬ知らない尻に帆かけて逃げ帰りけり

仲人は吾がゆく後を追ひかけて明日から牛乳買はぬと怒鳴れり
 難題をかける家には牛乳を買ふといつても売らぬと逃げゆく
 仲人は三町ばかり追ひ来りおぼえてあるとにらみののしる
 仲人のとがりし声とこはき目に足もとたちたち逃げ行く田の畔

この村に得意はあれど翌日は牛乳も配らずさぼりたりけり

血潮 二十五六歳の頃

母親の肩で風きりかへりたる三日目の朝彼女のふみ来る
 玉章を披きて見れば京都市へ奉公にやらるとしるしありけり
 京都市の呉服店にて奉公すると彼女の手紙こまごまきたる
 真心の君におはせば一度位は訪ね来ませとしるしありたり
 矢も楯もたまらず京都市大宮通り四条の呉服店を訪ひゆく
 呉服店に入りて品物調べつつ待てども彼女のおもかげもなし
 上女中なりしがためか店の間に何時まで待てど彼女は見え
 店員に顔のぞかるるじれつたさ羽織地一反買ひてかへり

丹波より六里の雪の道ゆきてかへる夕べのさびしきころ
 彼女等のこと思はじと雄心に諦めみれどもわすらえなくに
 待てど待てど来ませぬ君ぞ恨めしと暫くたちて彼女の文来る
 真ごころの文見て胸の高鳴りのやまぬくるしさ又京に上る
 呉服屋の店をふたたび訪ひゆきて待てど彼女の声だも聞かず
 二時間余店に待ちしがあきらめてまた袴地を買ひてかへりぬ
 それ以後は彼女の方より文も来ず吾もゆかなく年ふりにけり

青春の血に燃えつつも行末をおもへば恋の鋒先ゆるみぬ
 ひとり立つ身にしあらねば恋心おこすべきかはと諦めてけり
 時折に彼女のうはさきくごとにあきらめし胸ふたたび高鳴る
 若き日の血潮燃えたつ秋の日に紅葉狩してころなくさむ
 忘れむと思へどときどき夢に見る彼女の姿に悩みし若き日

夢現 二十五六歳の頃

恋人を京阪両地にさらはれて一人さびしく牛飼ひにけり
 糞汁にまみれて朝夕牛を飼ふ若き日の吾血は燃えさかる
 里の女は数多あれども彼女等にくらべて胸の血は湧きたたず
 浄瑠璃の稽古をはりて帰るさの辻に彼女のまぼろしを見し
 ああ君と云ひよる刹那に煙のごとパツと消えたる気味悪さかな
 わが魂は彼女にかよひ彼女の魂はわれにかよふか毎夜夢見る
 縁あらばまた逢ふことのあるべしと果敢なきことを頼みて慰む

妻帯をすすめられても何となく心むかざり彼女をおもへば
 あちこちの家に浄瑠璃会ありて吾もかがさず出演をなす
 浄瑠璃の吾が声よしと田舎女が銅貨つつみを雨と降らせり
 見台に袴つけて端坐しつかたりいだせば拍手のあられふる
 三味線ひきは老いたる女吾はまだ二十六歳の青年なりけり
 いつとても耻かしく思ふは浄瑠璃の文句の末の泣き落しなりけり
 しがみたる顔を見せまじと泣く場所のみは三味線で誤魔化す
 滑稽なお俊伝兵衛の猿廻し与次郎語るがはづかしかりけり
 浄瑠璃の稽古の友は十二人隣の村までかたりに出でゆく
 隣村で浄瑠璃語るをりもあれ意中の女を不図見とめたり

養子 二十五六歳の頃

失戀の身にも世間はひろきもの春のひかりはさしそめにけり
 白梅の月にかをれる夜なりしよ思はぬ人と木蔭にたたずむ
 ぼつかりと月に浮き出し白い顔わが目に花のごとくうつれる心臓の鼓動はげしく
 をさまらず面ほてりつつしばし黙しぬ

ただ二人黙したたすむ足もとにどる足の犬きたりとびつく
 飛びつきし犬に彼女はおどろきてあつと叫びて抱きつきたり
 鼻先にぶんとにほひて体臭の忘らえがたき身とはなりぬる
 如何にしてまたあはむかと彼女いふ吾は牛乳買へとすすめし
 二三日たちて彼女の母親は牛乳くばれと註文なしかへる
 思ふ図にはまりしよなとよるこびて朝夕二回牛乳くばりゆく
 彼の女病床にありて牛乳を飲みそつと吾が顔ぬすみ見て居り
 牛乳をつく缶持つわが手ふるひつつ出もせぬ咳にまぎらせにけり
 足すでに門を出づれどわがひと彼女の床にしみつきて居り

吾が胸の高鳴りおさへ父母に顔ほてらしてうちあけにけり
 吾が父は頭を縦にふりながら早くもらへといひつつほほ笑む
 仲人をたのみて彼女の両親に結婚談を持ちこませたり
 只一人の娘なりせばやられない養子にならばと彼女の親いふ
 わが父は長男なれば養子にはまたやれないと頑張りてをり
 わが恋は危機一髪の間になり五臟六腑の血はわきかへる
 牛乳をくばりたる朝玉章をそつと彼女のたもとに投げ込む
 若者の心をくまぬわが父その無情さをうらみてもみし
 何故にわが真心の通はぬかと出雲の神まで恨みてみしかな

百日 二十五六歳の頃

二三日たちて彼女の水草のあとくろぐると父の手に入る
 朝夕の仕事もろくに手のつかぬ子養子にやらむときり出す垂乳根
 同情の親の言葉に感激しうれしなみだにしばしくれたり
 双方より吉日良辰あひえらみいよいよ結婚式を挙げたり
 斉藤の家の養子となりながら依然と牧畜業をいとなむ
 今までの恋びとに比して背はひくく色浅黒きをもの足らず思ふ
 牧場に毎夜とまりて養家へは十日に一度かへりていねにし
 養父母はわが身を近くまねきよせ気に入らぬことばかりいひ出す
 一人の大事の娘を大切にしてくれぬならかへれときり出す
 大望をかかへし身には女房位かまうて居れぬと与太をいひけり
 牧畜業ぐらゐしてゐて大望も糞もあるかと養父はおこる
 人間は行先を見ねばわからない何時まで牧畜する気はなしと応ふ
 牧畜をせぬなら養子にほしくないあて外れたとおどろく両親
 両親はわしが気に入らぬわしは又嬢がいやだと駄駄ツ子をいひみし
 女房は側にしくしく泣ける見て一寸自分も気の毒になりぬ
 斉藤の家風にあはぬこの養子出てうせるよと養父追い出す
 そちから放り出さずともこちらからほり出てやるといふ捨台詞
 斎藤の家庭をおそふ低気圧暗雲低迷かみなりごろごろ
 結婚の式挙げしより百ヶ日たちし夕暮縁きれにけり

歌舞 二十五六歳の頃

むつかしき養家の親子にわかれてゆそろそろ歌舞の稽古はじめぬ
 稗田野の佐伯の糸子を師匠とし毎夜かよひて歌ひ舞ひけり
 雨の夜も雪の夕べも通ひつめぬ歌舞のほかにも望みいだきて
 長唄や端唄やをどり舞曲ならひお茶屋がよひの基礎つくりたり
 舞ひ振りや喉の加減をきかせたさ芸者しらして毎夜さわぎぬ
 夜な夜なに遊ぶくるへど牧畜の業は夢寐にもわすれざりけり
 元来は下戸なりし吾やけになり茶屋にかよひて一升の酒呑む

朝夕に四五里の道をはせめぐり牛乳くばりひと日もかかさず
 牧場の乳牛いづれも子を産みて日日に事業は栄えたりけり
 三人の組合なれどおもにわれ牧畜搾乳販売なし居り
 亀岡と東本梅に同業者ありて競争日日にはげしき
 得意先うばはれまじと朝夕に疲れも知らず牛乳くばり行く

夕暮に仕事かたづけ野路越えて歌と舞との稽古に出で行く
 春雨や淀の川瀬や鶯宿梅吾がものなどを得意に舞へり
 面白き遊芸なりせば知らず識らず手振り足振り上手となり舞ふ
 百姓の若者なれど歌や舞曲知らでなるかと毎夜ならへり

落角 二十五六歳の頃

後家の家に牛乳配りゆけば吾を見て地蔵眉毛と追ひかけまはる
 新田の地蔵をまつるこの後家はわれを仏と間違へたるらし
 牛乳くばるお前は子供の守り神地蔵地蔵と追ひ来る後家婆
 牧畜のほか小作田五千坪牧畜のひまにたがやしにけり
 乳牛の糞尿のこらず田に入れて土肥えたればみのり豊けし
 朝夕に江戸腹当や法被きて附近の村むら牛乳くばりゆく
 一合の牛乳は三銭そのときの米八合に相当なしたる
 あちこちの医者世話にて病人のある家ごとに牛乳配りけり
 牛乳くばりかへる夕べに辻相撲とりて左の臂きずつけにけり
 幸ひに左の臂のきずなれば牛乳しぼるにはさしつかへなき

牛の背にまたがり小幡の川わたり揺り落されて水中にしづむ
 乳牛はわれを川水におとし置き悠悠牧場にかへり居たりき
 川中をはひ上りつつ濡れ衣をしぼりてそろそろ牧場にかへる
 腹たちてこん畜生といひながら頭を打てばぼろりと角落つ
 片角をおとしたりとて乳牛のあたひ半分に足らずなりけり
 落したる角を拾ひてつぎ見れど首ふるたびにまたぼろり落つ
 めけ落ちし角の根もとにやはらかき一寸ばかりの若角生え居り
 若角は血にまみれつつ痛さうに乳牛は頭を下げて寝て居り
 翌朝より乳の分量激減し他の牛乳屋にて買ひくばりけり
 此牛乳は味がちがふと得意先ゆ小言きかされ値切られにけり

牧場で青年隊と牛肉を煮て食ひわれは腹をくだせり
 牛の餌を煮る大釜にて牛肉をたくは無茶よと村上氏怒りぬ
 その鍋をそのまま牛の餌を煮れば牛はフンフン臭ぎて喰はず
 止むを得ず川水に鍋洗ひ清め餌を煮てやれど又牛食はず
 軽石をもちて鍋皮研き上げやうやく牛に食てもらひける

忍路 二十五六歳の頃

白梅の花から桃へ桜へと蝶のごとくにうつらふわかき日
 桃色の面はうるはし桜花のかをるもめぐし春のころは
 吾が軒に巣くふ燕の仲のよさつらつらみつつもゆる胸の火
 紫雲英咲く田の面にたてばその君の姿霞のなかにうきをり
 春の野は人の目しげし紫雲英咲くああこの赤き花のむしろよ
 二尺余りのびたる麦の畑いくつすかして見ゆる姉さんかぶりよ
 吾がもゆる心も雲雀は白雲の空からしきりにぞよいてゐやがる
 森かげに簀うちしきてやすみをれば彼女は母とわが前とほる
 吾が恋ふる人の母とは思へども心に淡きいまはしさのわか
 母親の後よりちらちらふりむきて吾が面見つつゆく女かな
 吾もまた彼女のかげの隠るまで目をそばだててのびあがりつつ
 掌中の玉を奪られし心地してわれ森かげに呆然と立てり

あしびきの山鳥の尾の長ながし春空の日はかたむかぬかな
 やうやくに日はかたむきぬ野良仕事をはりて吾は家路に帰る
 夕飯の箸投げ捨ててしのびしのび彼女が家の軒にたたずむ
 おそること一つも知らぬ吾ながら何故か彼女の前には弱かり
 春の夜はなやましかりき花にほひ鳥はうたへど吾が恋遠し

意馬 二十五六歳の頃

花にくるふ小鳥や蝶の自由さを見るたびごとに羨みて見し
 意地悪き彼女の母は瞬間も目はなざざりき影のごとくに
 百日で追ひ出されるやうな男の子には相手になるなと彼女の母云ふ
 れんじ窓の外より親娘の問答を闇にききつつ歯ぎしりをかむ
 れんじ窓の障子の破れゆのぞき見れば女淋しげに寝巻着替へる
 短夜の眠たさこらへて要領を得ざるにほつと吐息つきたり
 ふつつりとあきらめむかとは思へども心猿意馬はますます狂ふ
 馬鹿らしい女ぐらゐに益良男が悩まざるかところを叱る
 青春の血は体内に燃えてゐるあきらめられぬと吾が心いふ
 かほどまで吾をなやます曲者は退散せよと唸鳴りても見し
 吾が前途閉ぢふさがれし心地して菖蒲も牡丹もまなこに入らず
 吾富める家の子なればかくまでも悩ましものをと歎きし春の夜
 大象も女の髪の毛ひとつとすぢにひかるる喩を知りしわかき日

青雲の希望をいだく若者われもまよひけるかな恋の闇路に
 吾が恋のまとまらぬうちに花の春は早くも青葉の峰にうつれり

夜な夜なにわが見し夢は花のゆめ紫のゆめ桃色のゆめ
人恋ふるこころの空は五月闇の山時鳥か血をはきて啼く

後姿 二十五六歳の頃

野上がりの青草刈らむと山にゆきて彼女に逢ひぬ谷川の辺に
話すべきことは山ほどありながら口籠もるかな故は知らねど
谷川の水を鎌にていぢりつつ彼女も吾もうつむき向へり
盗み目に彼女の面をながむれば色紅に染まりてあるも
瀬をはやみ岩にせかるる谷川の百人一首の歌身にせまる

この歌をひそびそよみつ何ゆゑか彼女の前に声ふるふなり
彼の女つと立ちあがり籠を背に負ひたる刹那人声きこゆる
入声の近づくままによく見ればあはれ彼女の叔父にてありけり
このやうなところに二人何してる早くかへれと叔父の高声
彼の女ハイと答へて籠を負ひかへる後姿何か淋しき
彼の女しほしほかへる後姿を見おくるわれは胸さわぎすも
あきらめし女なれどもゆくりなく今日逢ひしより再び胸燃ゆ
人なきを幸ひわれと吾がこころ大馬鹿者よと呶鳴りてもみし

石垣の崩るる如くガラガラと木の茂みよりわらひごゑわく
谷川辺に吾呆然とたたずめば草刈りの友四五人あらはる
馬鹿野郎あんなすべたがどこがよい見捨ててしまへと草刈りの友いふ
梟鳥の夜食にはづれし心地して体裁わるくわれ黙しあぬ
この日より噂ますます高まりて肌知られぬ濡衣きにけり

○
朝夕に牛乳の配達おこたらず昼は野山に草を刈りたり
一寸に足らぬ芝草刈る夏のあつさに汗はたきとながるる
石ころに鎌すべらして中指の先をしたたか欠ぎとりにけり
○
中指の尖端鎌にむしられて草刈るわざを是非なくやすむ

○
浄瑠璃の夜半に逢ひたる中村のをみな訪ひ来ぬ夏の一夕暮
背は高く身体は肥えて色白く夕べのわが目に麗しかりけり
今日からは炊事裁縫手伝ふと女房氣どりて彼女言ひけり

押掛 二十五六歳の頃

今シヤンがしのんで来たと若者がわが牧場のまへにささやく

つぎつぎに若者つどひ人垣をつくりて庭にささやきあへり
 さすがにも吾はづかしく夜具かぶり息をこらして黙しめたりき
 豪胆な彼女は表戸ひきあけて皆さんお這入りなされと招く
 若者は潮のごとく門ぐちを押すな押すなとみだれてぞ入る
 こりや喜楽馬鹿にするなどぞめきつつ座敷にのほり吾が夜具をはぐ
 こりや助平何をさらすといひながら吾いきどほりはね起きにけり
 あはははこりや面白いおもしろい喜楽怒つたと友は手を拍つ
 彼の女すつかり度胸を落ちつけて妾や喜楽の女房だといふ
 女房を貰うて何故披露せぬ祝うてやらうと水ぶつかける
 何をする乞食犬ではあるまいに水をかけるとはあまりとなじる
 ここにゐる現在美人が女房だと証明してるとぼけるなど友言ふ
 やむを得ず酒を一斗米五升雑魚三升買うてふれまふ
 若者は牛の餌焚く大鍋に米と雑魚とをぶちこんで煮る
 一斗の酒に若者舌もつれくだらぬくだを巻きはじめたり
 若者の下戸はやはには雑魚飯を腹につめこみころがりうめく
 おひおひに酔ひがまはりて若者はそろそろ殴りあひを初めし
 おひおひに酒がまはりて怒る奴笑ひつ泣きつ騒がしき吾が居間
 円滑な彼女の舌にまきこまれ喧嘩もやうやくをさまりにけり
 朝まだき村上氏きたりこの体をながめて眉に深皺よせる
 村上氏舌打ちしつ喜楽さんお目出度くない馬鹿よと罵る
 次ぎ次ぎに欺し欺され何んのざま又欺すのか欺さるるのか

親子 二十六七歳の頃

夕暮に吾が住む館にたづね来しをみなをおくる真夜中の道
 小幡橋わたるころより雪降りて吹く風さむく家路にともなふ
 約二里の彼女がやかたへ雪の道高下駄はきておくり着きたり
 中村の彼女の父はおどろきてお前は何処の馬骨かと訊く
 侠客の名を売つてゐた多田亀は一人むすめの彼女の父なる
 多田亀は吾が首筋を押へつけこれでもどうだと拳骨ふりあく
 吾が家の一人娘を貴様等の自由にさせぬと声高に吠鳴る
 僕ばかり悪いのではないお互ひよと首押へられつ言ひかへしたり
 ふりあげたその拳骨を如何するかお前の可愛い娘の男よ
 多田亀はプツと吹き出し手をはなしお前は度胸が太いとほめる
 俺とこの養子になるならこの娘やつてもよいと微笑みて言ふ
 百日目に養家を出されたこの男これでもお氣に入るかと吾云ふ
 そんなこととくの昔に聞いてゐる俺は娘のこころ次第だ

彼の女両手をついてお父さん貰つておくれよ一生の願ひだ
 これからは侠客の道教へてやるなどとそろそろ喧嘩の話す
 盃を片手ににこにこ多田亀は穴のあくほどわが顔をみる
 一寸気の利いた男よ侠客になればかならず名を挙げるだらう
 多田亀といへば丹波の山中で押しも押されもせない侠客
 脊はたかく身体はふとく力強く一寸見てさへおそろしき男
 鬼とでも組みつくやうな侠客も娘の愛におぼれしとみゆ
 やがてもう夜があけるから穴太まで送つてあげよ彼女に父いふ
 親と子の縁を結びの盃を重ねてひよるひよる雪道かへる

髻梳 二十六七歳の頃

友禅の派手な蹴出しを冬の風にまくらせ彼女は吾を送れり
 高下駄を穿ちて雪道かへるさの田圃のなかに転げ落ちたる
 起きるのは容易なれども彼女の手に抱かれむ為そのままにをり
 彼の女悲鳴をあげてわが身体力にまかせ抱きおこしたり
 雪道はもう歩けない負うてくれと駄駄こねてみし夜明けの野路に
 大力の女わが身を背に負ひて人里近くあゆみつきたり
 喜楽さんもう夜が明ける恥しいここから歩いておくれと女のいふ
 こんなこと恥しやうで神聖の恋出来るかとわらひつなじる
 どうなつと勝手におしよ知りませぬこれから家へ帰ると泣き出す
 左様なら一人で穴太へ帰りますと下駄を手に持ち跣足で走る
 走りつつふり返り見れば彼女の女跣足になりて追ひかけきたる
 川上の村にかかれれば流石にもうら恥しく消えたく思ひぬ

牧場にかへりてみれば時おくれ村上技手のすぎ顔付
 これからは心得ますと頭掻けば村上にやりと笑うて顔みる
 ついて来た彼女は軒にたたずみて恥しさうに泣きわらひせり
 村上氏彼女にむかひ寒いのに御苦労さまと皮肉言ひ居り
 この頃はどうかしてゐる喜楽さんを気をつけなされとやじる村上
 こら親爺がまうてくれなと言ひながら薪ふりあげて吾は鍋を打つ
 叩きたるはづみに鍋の耳とれて村上爺さん舌打ちいかりぬ
 門口から小便はこく鍋は割るええ餓鬼やなとまたも舌うち
 彼の女三日四日と流連し母の宅までたづねて行きぬ
 お母さん私は喜楽の妻ですと初めて逢うた人にかたる彼女
 ああさよかお前が倅の女かとすましがほなる気楽な母上
 お母さん髪をとかして下さいと母の黒髪くしけづりをり

女房になるのは可いが吾が倅欺す注意と母いらぬこと言ふ
喜樂さんにだまされましても満足と彼女も氣樂なことを云つてる

野送 二十六七歳の頃

この日頃病に臥せるわが父はどれなと女房にきめおけといふ
内縁の妻はあれども一生の妻見あたらすと吾こたへけり
わが生命も長からじ一日もはやく安心させよと父言ふ
大いなる希望ある身はやすやすと会心の妻見当らざるなり
父と吾の話をもつと立聞きて彼女はたちまち泣きいだしたり
しまつたと心をのき次の間にたち出でみれば彼女のかげなし
裏口の戸をあけみればわが母は彼女の袖をひきとめてをり
喜樂さんの心の底が見えましたあきらめましたと泣き泣き逃げゆく
心には少しかかれど男子の身追ひかけゆくを恥ぢらひてやむ

吾が父の病おもりて親戚に危篤の電報いそぎ打ちたり
京都市や亀岡園部河内など親族おのおのあつまりきたる
吾が父は吾に抱かれてやすやすと眠るがごとく息絶えにけり
吾が父の国替さへも知らずして母は炊事にいそしみませり
母の名を呼べばおどろき来給ひし時には既にこときれてをり
わがが父は五十四歳を一期としかへらぬ旅にやすやすつきぬ
一生の別れを父と告げにけり吾二十七歳になれるはつ秋
金剛寺住職たのみ仏式で西山墓地に野送りなしたり
野送りの後にひそひそ随ひて泣き泣き彼女も加はりてをり
垂乳根の父に別れし悲しさに吾が浮きごころとみに沈まる
貧乏な世帯の主となる身ぞと思へばしばし恋にとほざかる
雨のおと風のひびきも何となくさびしくなりぬ秋の夕暮
大任の身にふりかかりし心地して貧乏世帯の主人となりぬ
祖母と母弟妹五人を如何にして養はむかと思へば寂しき
亡き父の借金返せと村人のきびしき談判に吾悩みつつ
はたらきて弁済すると吾が宣れば鼻であしらす金貸の男
碌でない女にうつつ抜しつ金返せるかと危ぶむ金貸

捨鉢 二十六七歳の頃

稲みのる秋の田の面に親鳥にはなれて一人鎌もつ若き日
霜のあした雨の夕べをひしひしと淋しさ迫る父なき吾には

稲みのる秋の田の面に茫然と鎌握りたるままとたはずむ
 あかあかとうれたる柿の梢にも心いたためぬ亡父を思ひて
 霜降りしあしたは思ふたらちねの父と大枝の坂越えし日を
 白梅の花もみ空の月かげも観る気にならず親なき吾には
 野に山にいそしみ給ふははその母のすがたの何かさびしも
 八人の家族のこして神さりし父のこころをしのびてなみだす

世の中の一切萬事いやになり捨鉢氣分で浄瑠璃にふける
 節のなき根深太夫とそしられてなほこりずまにうなる浄瑠璃
 目の見えぬ吾妻太夫の家に通ひ無精矢鱈にうなりつづけし
 めしひたる吾妻太夫は大阪の文楽座よりくだり来しひと

親戚のひとびと来り正式の妻をめとれと勧めてやまず
 正式も准正式もあるものが自由結婚せむとてこばみぬ
 親戚の言葉きかねばこれからは勝手にせよとて怒る治郎松

仮面 二十六七歳の頃

田舎には気のきいた女一人もなしと思へば淋しくなりぬ
 甲の女と結婚すれば乙の女が茶茶いれるかと思ひわづらふ
 甲も乙も丙丁戊も土臭く気に入らぬとてさまよふ結婚
 侠客のむすめ一人吾が家に流連なしてかへるともせず
 乙丙の家を訪はむと思へども彼女にさまたげられて意を得ず

要領を得むとおもひて不断から不得要領の仮面をかぶる
 山に寝ね草に伏しつつ若き日の人目をしのぶラブ・グロテスク
 若き日のラブイズベストをとなふれど会心の者なき田舎かな
 玉の緒の命のラブはうばひさられやむを得ずして屑のみ拾ふ

搾乳もそろそろいやになりけり仔牛の心おもひはかりて
 肝腎の乳はしぼられひよるひよると瘠せたる仔牛に涙こぼるる
 糯米の粥などたきて牛の仔に朝な夕なに喰はせけるかな
 数頭の仔牛に夜はおそはれて幾度となく床はね起きたり

うばたまの暗き淋しき敷小路も雨ををかして通ふ君許り
 田の中の溜池のそば忍びゆけば青き火燃えてぱつと消えたり
 人魂は三個ならびてまた出でぬ竹 辰 萬の溺死の亡霊

人魂を淋しき野辺に一人見て胸をのきぬ足はふるひぬ
 淋しさと恐さ忍んでたどりゆく夜半の恋路はあさましかりけり
 人並に恋は知れども吾若き日は余りにも忙しかりけり

誘惑 二十六七歳の頃

西条の飲食店にあそぶ夕べ見知らぬ女艶書くれたり
 雪隠にいりて艶書をひもとけば明日の夜某所に来たれと記せり
 友の目の多きその夜は一目だも眠らず夜の明くるを待ちけり
 花匂ひ蝶は舞へども春の日のたそがれ遅きを待ちあぐみたり
 乳牛に夕べの食をあたへおきて人目をしのび牧場を出づ
 彼の女たづねて行けば影もなしただ一通の置手紙あり
 置手紙とる手遅しとひらきみれば内丸町の某家と記せり
 足速に某家に行けば当の女酒や肴をこさへてまてり
 恋人のあつき心を無にせじと舌もつるまで盃かたむくる
 荷車のゆく音ききて目を覚まし夜明けと思ひとび起きにけり
 彼の女吾が衣手をばひきつかみ真夜中ですよと止めてやまず
 昼のごと明き月夜にあざむかれとむるもきかで飛び出し帰る
 彼の女追つかけ来り明日の夜はゆつくりネーと半ば泣き居り

風の口の野路に帰れば空暗くねむけもよほし足も運ばず
 真夜中の野路を睡魔におそはれて道に藁しきよこたはりけり
 藁の上によこたはりしまま熟睡して華胥の御国に遊ぶ春の夜
 野の小路にいねたるわれは牛車ひく大牛に起されにけり
 目覚むれば牛は鼻にて吾が顔を息もあらあらかぎてゐたるも
 牛の鼻ぐつとつかみてやうやくに微傷だもせず起きあがりたり
 牛車ひきたる人は六人づれ夜のあそびの友のみなりき
 こりや喜楽馬鹿にするなよ亀岡へ行きよつたのだおこれと唼鳴る
 おこるともそりやおこるともおこるとも牝牛の鞆丸もてこいといふ
 馬鹿にすな牝牛に鞆丸あるならば馬にも角があると友いふ
 風の口の朝の空を春風にふかれて帰る眠たさつらさよ
 車清の土橋を渡るねむた目の足の千鳥のあやふかりけり
 小幡川板橋渡れば朝風のぼやぼや眠し朝がへりの身に
 小幡神社華表の下に手を合わせ昨夜の吾の行為を詫びたり

寝巻 二十六七歳の頃

ねぼけたる顔をかくして尻からげ一目散に牧場にかへる
 牧場にかへりて見れば村上氏はや搾乳を終りてありけり
 喜樂さんまた昨晩もお楽しみなどとからかふ村上老人
 遅刻してすまぬといへば村上氏毎度の事よと声あげて笑ふ
 村上氏曾我部へわれは稗田野へ法被装束牛乳くばりゆく

稗田野の歌舞の師匠の家に入り牛乳くさらして顧客におこらる
 その夜は歌舞の師匠の家にとまり寝巻の袖に尿かけらる
 歳はまだ十五の歌舞の師匠さんに尿かけられ憎しと思はず
 火の如く顔あからめて歌舞の師匠部屋の小隅にうつむきてをり
 小便にぬれし寝巻を帰り路の小川にそつと投げ捨てにけり
 朝の牛乳をしぼりてまたも稗田野に配達してゆく顔を見にゆく
 吾が捨てし寝巻の袖に二十円入れたることを思ひ出したり
 二十円の金思ひ出しておどろきて捨てし小川に衣さがしゆく
 幾度も川の上下さまよひて探せどさがせどあとかたもなし
 天川の部落の小さき家の軒にわが捨てし衣ほしてありけり
 衣ほせし家をたづねて袂より色のvariし紙幣ひき出しぬ
 この着物あなたのなれば返しますとその家の主おとなしく言ふ
 金あれば着物なんかはいりませぬと吾おとなしくおいて帰りぬ
 春の日の花にたはむる蝶のごと父なき吾はむなく日を消す
 牛乳を近き村村に配りながらうら若き日を希望にくれつつ
 大なる希望はあれど貧しければ事業励みて身を固めむと思ふ
 若き女に吾は心を奪はれず希望にいきて時にたはむる